

古史傳

自第六十七段
至第七十三段

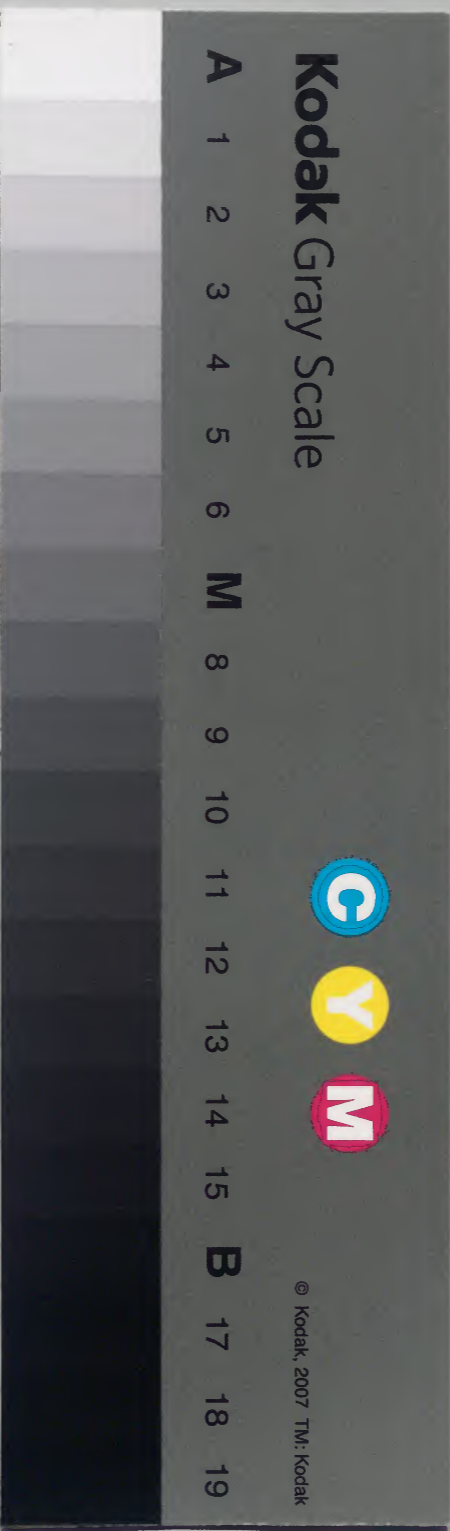
十五

和
歷
茅
四
号

和 書 門	日 二 五	一 三 一	函 號	類
冊	架	架	架	架
四 〇	一 一	一 一	一 八	一 八

內 閣 文 庫	和 書
四 二 五	一 三 一
一 四 〇	一 一 八
冊	架
四 〇	一 一

內閣文庫	
番號	和 42518
冊數	40 (18)
函號	140 185



高麗王本生記

附錄中世史記

平壤府志

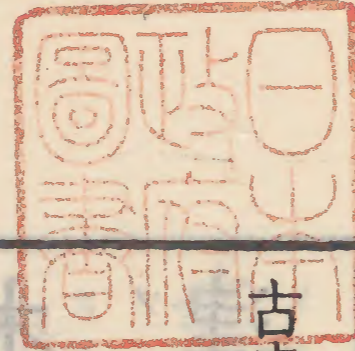
卷之三

風俗

爾其子五十猛神亦稱伊本師

星見初天降虫時多將樹核而

下坐矣雖然不殖轉地蓋持續



七十六

古史傳十五出卷

カミノナカツキナニキトイフキ
神代中七出卷

平篤胤謹撰

男 鐵胤

孫 延胤

續攷

爾其子五十猛神

亦云伊太祁
曾神亦名大

屋毘 初天降出時多將樹種而

下坐矣。雖然不殖韓地。盡持歸

古史傳十五

一

而始自筑紫島而大八洲出圀

内悉播殖而成青山矣所以稱

五十猛神而謂有功出神即坐

木圀大神是也此神出妹大屋

津比賣命亦云大屋次栺津比

賣命亦分布木種矣故此二柱

神亦奉渡於木圀即木圀造出

齋祠神等也五十猛神亦謂韓

神曾富理神此者坐宮内省神

也

五十猛神。おて舊訓ふ從て。伊曾多祁流と訓ばし。八十建
例もはと伊多祁流とも訓べきり。日本紀よ伊と云ふよ。多くて五十や書とま
むあり。亦名を伊太祁曾と云字も思ふべし。荒び建び給ふ由の御名お也。○伊
太祁曾神。御名義出雲。因仁多郡よ。伊我多氣神社あり。此
を杵築大社記ふ。伊我多氣大明神也。五十猛神是れ也と
有也。然れど伊を嚴イカの省語ハツキゴトあるり。太祁は猛曾タケノは熊曾也
曾と同じく。此も建きをいふ語れ也。第八段熊曾因の下
曾て佐乎の切りふて。五十猛有功神ふを非ざる○大屋
う。あや。此御名此事を師説も有り。下よ注ばし。毘古神。おれ神やぐて禍津日神ふて。亦名を大綾津日神
也も申して。綾とを禍マガの義おゆる。大綾也阿字省て大屋

と云ふ。委くを下第二十七段の傳。小註ばし。○初天降之時と也。サキニアモリマセルトキニ
前ふ須佐之男命と共に降坐る時を云ふ也。○多將樹種サハニモチコダネラ
而下坐テタリマシ也。纂疏サハニモチコダネラ。樹種可樹藝草木之種子也とあり。然も
有シ。諸穀物の種。諸菜也種。諸菓物の種。まよ桑麻あど。
其ホウ多加るべし。皆樹藝交てを得有まじき物
ども也。天上アメれ種くは木種を將下也給へる由あり。抑木
草は。因土の成まると共ふ。蘆桃アサモあどは如く。希スレふ生ある
もあれど。多くを稚産靈神ワクムスビノの産靈。はと其御子豐宇氣毘
賣神ウケミカミ。奇魂クシマタ。木神野神ノノカミ。産靈ムスビふ成出ある中よ。止事ヤゴトおれ
本草の種也。悉く天御因ツよ有るむを。此時將降モチクダらして殖
給へはと也。世ヨふ無て叶ツを燃種くホヒレの本草オヒレは生茂れる事

を知られぬ也。大凡世に無て叶てぬ本草を皆皇國に生
ず。能く思ふも有る。葉をふりて木草をば、此の渡らば、何してま
し。亦次く思ふも有る。數に出來れど、能く探して、遂に物と思へ
叶てぬ物ども、遺るに出來ず。醫藥の方、此の道、古風、此
かく開け、さるに合せて、醫藥の方、此の道、古風、此
開々、さるに合せて、醫藥の方、此の道、古風、此
むす、今まで用ゑ、此の葉、此の中、其の道、明免、事欠
ざる物も、何れと出來、但し、かく言ふ、皇神、ちの御
此物を忌み、用ひ、或と云ふ、非、然るは、皇神、ちの御
心と、此國、よあき、物を、悉く、外國、く、り、貢奉、らし、免て、皇
國の要と、為と、る、御定、免の、有れ、り、**○不殖韓地盡持歸**
あり、其の神功、皇后、卷、お、委く、云べし。
韓地とは、西の國、を總て、云ふ、不殖持歸、とを、か、れ
困く、た、渾沫の凝成、れ、國ある、故、直、と、り、生、藝、では、
要を成、ざる、木草、ども、此、生、茂、は、ま、じ、き、土、性、ある、事、を、知

看して、持歸、**己**給へ、依成、**は**し。天、壁立、極み、廻、坐、る、事、も、も
ら、**ち**て、外、國、く、お、多、う、る、木草、ども、は、此、後、お、大、汝、小、汝、神
む、**此**、彼、國、く、を、造、營、**免**給ふ、時、お、土、性、よ、相、應、**ふ**、**は**き、木草、と
も、を、殖、布、し、給、**予**る、も、有、**は**く、**は**と、二、柱、神、の、國、巡、**己**給、**予**
依、時、お、出、雲、國、多、禰、里、お、稻、種、の、墮、**と**依、事。此事、九、十、一、段、よ、出、と、り、
ま、**多**、西、戎、國、**お**て、も、神、農、と、云、**け**る、王、**此**、時、お、天、を、**己**粟、**此**
降、**と**依、を、殖、付、**多**ゆ、**も**、云、**ひ**傳、**ふ**依、事、**れ**ど、の、あ、**る**お、合
せて、思、**予**む、天津神の種を降し、賜ひ、**む**も、知、**は**ら、**ら**ぬ。
今も種々の種、此、空、を、り、降、る、事、**は**、**時**、**く**あ、**る**事、**あり**、大、凡
西、**お**る、國、**く**よ、生、依、木草、ども、は、直、**朴**、**お**ら、**ぬ**中、**お**も、木、**を**
惡、固、く、希、**お**堅、**あ**ら、**ぬ**木、**も**有、**依**、**を**、**甚**、**も**、**ろ**、**く**て、良、材、**お**ら
ぬ、其、**を**、唐、木、**と**て、渡、り、來、**る**木、**は**、**多**、**く**彼、國、**く**の、家、**作**、**よ**用

ひとる古材あるを其木質を見て惡木ある事を知べし
奇南香紫檀黒檀イヌホド云木ども小けき器械あどお
作りてこそ珍しくも見ゆれ案を○筑紫嶋を。上小出と
何の要とも有らぬ木ども也。○筑紫嶋を。上小出と
見べし。神代口訣。肥前国西南沖有五十猛嶋と云。其は此時御坐せる地あどよや。神名式。筑前国御笠郡
筑紫神社。名神。とある社の祭神を。五十猛神ありと。貝原
氏の和爾雅。見えとめ。此嶋を。事始。大八嶋の国
内悉く。樹種を生し給。此處も御靈を鎮ふ。き
事ぞかし。此社の起。筑後国風土記。昔荒ぶる神有て。
云。るを。後。祝。祭。り。て。筑紫神と申。去。と。あり。是。筑紫を
いふ。国。名。の。起。あ。正。此。を。さ。む。り。此。有。功。を。此。と。正。始。給
予。依。り。其。社。此。れ。き。事。を。御。怒。り。坐。て。の。態。あ。る。べ。し。餘。神
神。も。例。あ。る。事。あり。さて。此。社。を。清。和。天。皇。紀。貞。規。元。年

正月授。從五位下筑紫神。從四位下。見え。陽成天皇。紀元
慶三年六月。授。從四位下筑紫神。從四位上。とあり。今も御
笠郡筑紫村の内原田村の北ある林中の高き処。南向
小坐せり。筑後肥前。近き。処。れ。り。と。ぞ。第八段筑紫の下。
ま。と。第七十四段。電。神。れ。○成青山。矣。は。前。須佐之男。命
処。も。注。ふ。を。見。べ。し。○成青山。矣。は。前。須佐之男。命
れ。枯。山。を。泣。枯。し。給。予。依。山。を。悉。く。舊。の。如。く。木。種
を。播。殖。て。青山と成。給。へる。由。あり。○稱。を。多。く。倍。と。訓。は
し。○有功之神。を。今。本。お。イ。サ。ラ。レ。師。の。伊。佐。遠。能。神。を。訓
ま。と。依。り。從。ふ。は。し。江。家。の。点。を。云。を。加。と。る。本。然。る。は。類
聚。国。史。お。伊。佐。乎。之。久。と。見え。日本紀。竟。宴。歌。お。伊。佐。袁。志
久。正。し。死。道。の。お。む。り。し。ち。云。く。れ。ど。有。る。故。り。伊。佐。袁。志
を。云。を。體。語。と。心得。依。も。有。げ。あ。ま。ぎ。志。を。用。の。し。云。ふ

詞ふて伊佐袁と云ぞ本語ありける。其は同竟宴歌よ。得天穗日命草木みあ言止とて葦原の因乎立ふし夷装鳴あべりゆ。と詠て其語書此中ふ。こあいたくあまの布ひれこあや。これうみのいさをれゆ。云くと有也。此は日本紀よ 僉曰天穗日命是神之傑也云くとある文を仮字ふ書とるふていさをれり。傑也。當れむ古訓イを然ぞ有けむを今本ふを傑也と訓。是を以て伊佐袁能神と訓べきあり。こを後の訓ふあそ。由を辨ふるし。言義を勇雄あらむ。紀中功字をイ然るふサミぎも訓也 伊佐袁といふ語を功字徳字れどの義と思ひ打任せて然言むこや。義を違ふれど。既ふ有功字を伊佐袁とも伊佐袁之とも體言ふ訓來おまむ。功德あど此字を去り訓

むも。今を非とは云がぬし。○坐木因大神是也。木因は名義此字の如し。紀伊と書む必二字ふ定むばしとの御制ふ因て紀音の韻れ伊を添とるあり此例 多し。右此如く木種を分播あるふ神の坐は故ふ。木因とを名けしあり。神名式ふ。紀伊因名草郡伊太祁曾神社。名神大月 次相嘗とある大神是あべ。文徳天皇紀よ。嘉祥三年十月。新嘗紀伊因伊太祁曾神從五位下と見え。清和天皇紀よ。貞觀元年正月。從五位下伊太祁曾神從四位下。陽成天皇紀よ。元慶七年十二月。伊太祁曾神從四位上あど有也。當因の神名帳 正一位勲八等伊太祁曾大神と見也。因史後の書等よ。諸因の神等よ。一階お上給子るあや數く有き。遂ふ正一位ふ上り給ひらむこと。然も有はし。さて此社は南紀名勝志。東庄伊太祁曾村の西北一里許ふあり。和銅

正平承久明應年中の綸旨あり其内和銅を紛失せ延元
の奉書小當國一宮伊太祁曾と書べし一宮記おは
名州郡日前國懸宮と有て祭神を天兒屋命孫石凝姥と
見ゆれど信がとし第四十五段の傳見合去べしさて扶
桑略記に延喜六年四月七日授紀伊國從五位下伊太祁
曾明神從五位下とあるを誤り師云伊太祁曾の曾を
契沖の魯字の誤あらむと云し一曰たり然もと聞也
れどおち思ふに此を五十猛有功神と云おは佐
乎を切むま曾とぬるあり故國史ま和名抄おは
もみお曾とありま國人も然云り但し國人の祁を伎
と云ぬる ○此神之妹大屋津比賣命 亦云大屋
おは妹を
は有れど眞の妹了非也はと御妻おも非也決然て速秋
津比古神は妹速秋津比賣神と同類よて五十猛神の分
身あらむと思也 風神志那都比古神の次お志那都比賣
賣神お此外おも同じ 其を五十猛神やぐて大福津日
例の神等いと數多あり

神ふて亦名殘瀨織津比賣神とも申して女神おも坐は
し大綾津日神とも申せば大屋津を大綾津の阿を省と
はる也 師説よ杖の用を舍宅を造るを主と云る故は
ぬ五十猛神を大屋毘古神とも申はふ此女神をま大
屋毘賣神と申はふ思ひ合せて辨ふはし 凡て尊き神等
と思ふお女神ありあり女神ありと思ふお男神あり
とまお一柱ありと思ふお二柱三柱お身を分ち二柱
三柱お坐坐神の一柱お身合給ふもありま男神子
おて分身お女神ありあり女神おして分身の男神あり
何此等の事どもを第廿五段第六十四段 ちて和名抄
第百廿七段おぞま次考へ記去る見べし ちて和名抄
お名草郡お大屋郷あはる此神の御名を正ぞ出けむ ○
梳津比賣命御名義いまと思得也 師説よ此を材よを四

方木也。と字書に見ゆ。万葉、哥、眞木、さく、檜の、燻手と云
 る此あり。然るに、扱と作るを、寫誤ありとあれど、説得ら
 れしやも。○分布は、上、播殖といふ文あり。其を受て、亦
 所思交。○分布は、上、播殖といふ文あり。其を受て、亦
 と有まば。此も麻、伎、宇、惠、を、訓、法、し。本、分、布、を、訓、れ、と、訓、み、師
 も、共、に、惡。○此、二、柱、神、亦、奉、渡、於、木、固、を、五、十、猛、神、と、三、神
 う、ら、び。共、に、惡。○此、二、柱、神、亦、奉、渡、於、木、固、を、五、十、猛、神、と、三、神
 共、ふ。木、種、を、分、布、し、給、子、る、故、に。木、固、に、遷、渡、し、奉、れ、依、由
 あり。神、名、式、に、名、草、郡、伊、太、祁、曾、神、社、に、並、び、て、大、屋、都、比、賣、
 賣、神、社。名、神、大、月。都、麻、都、比、賣、神、社。名、神、大、月。と、あり。右、三、
 本、を、一、所、に、坐、し、よ、や、文、武、天、皇、紀、元、大、室、二、年、二、月、分、遷、
 伊、太、祁、曾、大、屋、都、比、賣、都、麻、都、比、賣、三、神、社、と、あり。和、名、抄、
 名、草、郡、大、屋、津、麻、伊、太、祁、曾、と、い、ふ、郷、名、あり。御、紀、に、嘉、祥、三、年、十、月、紀、伊、固、
 祁、曾、と、い、ふ、郷、名、あり。御、紀、に、嘉、祥、三、年、十、月、紀、伊、固、
 大、屋、津、姫、神、都、摩、都、比、賣、神、從、五、位、下。貞、觀、元、年、正、月、從、五、

位、下、大、屋、都、比、賣、神、都、麻、都、比、賣、神、從、四、位、下、あり。南、
 名、勝、志、に、大、屋、都、比、賣、神、社、を、平、田、庄、宇、田、森、村、の、東、北、一、
 丁、許、に、大、屋、大、明、神、あり。當、固、の、神、名、帳、に、從、一、位、大、屋、大、
 神、と、あり。都、麻、都、比、賣、神、社、は、名、勝、志、に、山、東、吉、礼、村、に、中、
 お、あ、り。と、見、え、當、固、の、神、名、帳、に、從、一、位、上、都、麻、都、比、賣、大、
 神、ま、と、妻、之、御、前、社、を、山、東、庄、平、尾、村、の、中、に、あ、り。土、人、相、
 傳、り、て、此、神、を、伊、太、祁、曾、神、の、妻、と、い、ふ。依、て、神、事、を、伊、太、
 祁、曾、神、の、社、に、勤、む、と、云、へ、り。ま、と、或、説、に、杵、津、姫、と、云、え、
 此、社、に、吉、礼、村、に、あ、り。と、云、へ、り。考、證、し、は、今、在、
 吉、礼、村、と、あ、り。と、云、へ、り。考、證、し、は、今、在、
 上、に、あ、り。と、云、へ、り。考、證、し、は、今、在、
 う、木、固、に、遷、渡、し、奉、れ、依、由、と、考、ふ、依、由、に、須、佐、之、男、命、は、出、雲、
 固、に、御、坐、せ、る、に、彼、神、に、屬、て、坐、せ、る、神、等、あ、ま、た、共、に、出、
 雲、固、に、坐、け、む、と、決、ま、り。斯、有、は、師、説、の、如、く。須、佐、之、男、
 命、の、彼、固、に、遷、渡、奉、り、給、子、依、由、也、と、あり。師、説、に、出、雲、と、木、固、
 と、同、く、通、子、る、事、多、

し。ま。た。熊。野。て。ふ。地。名。二。国。ふ。り。ま。と。意。宇。郡。速。玉。神。社。
牟。婁。郡。熊。野。速。玉。神。社。ま。と。意。宇。郡。韓。国。伊。達。神。社。名。草。郡。
伊。達。神。社。大。原。郡。加。多。神。社。名。草。郡。加。太。神。社。お。れ。ら。み。お。
同。名。れ。也。此。皆。右。の。三。神。れ。出。雲。国。を。遷。り。渡。り。坐。し。時。
の。由。縁。あ。る。べ。し。奉。渡。と。を。須。佐。之。男。命。の。三。神。名。式。出。雲。
神。を。出。雲。国。を。り。渡。し。奉。り。給。ふ。お。り。と。あ。也。神。名。式。出。雲。
国。意。宇。郡。小。韓。国。伊。太。氏。神。社。此。を。王。作。湯。神。社。の。同。社。お。
ち。伊。達。よ。作。る。と。云。へ。り。師。の。上。お。引。れ。と。る。も。伊。達。と。
有。ま。バ。然。依。本。も。有。る。お。お。韓。国。と。し。も。冠。と。る。を。韓。
お。渡。り。て。帰。り。坐。依。神。あ。ま。む。お。り。其。を。豊。前。国。田。川。郡。よ。
辛。国。息。長。大。姫。神。社。と。云。あ。り。此。を。息。長。足。比。賣。命。の。韓。を。
伐。て。帰。り。坐。る。由。を。も。て。辛。国。云。く。と。白。比。と。聞。お。る。を。も。
思。ひ。合。さ。べ。し。ま。と。大。隅。国。贈。吹。郡。よ。韓。国。宇。豆。峯。神。社。と。
い。ふ。あ。也。此。も。韓。よ。由。あ。る。神。は。と。韓。国。伊。太。氏。神。社。此。を。
あ。る。事。を。言。ま。く。も。更。お。り。神。は。と。韓。国。伊。太。氏。神。社。此。を。
神。社。の。同。社。は。と。韓。国。伊。太。氏。神。社。の。同。社。よ。坐。せ。也。出。雲。
郡。よ。韓。国。伊。太。氏。神。社。の。同。社。阿。須。伎。神。社。ま。ま。韓。国。伊。太。氏。

神。社。お。ち。出。雲。神。社。の。は。と。韓。国。伊。太。氏。神。社。こ。を。曾。枳。能。
社。お。坐。同。社。よ。坐。せ。り。夜。神。社。の。同。
せ。也。此。等。み。お。伊。太。祁。曾。神。を。祭。れ。る。社。う。其。は。韓。国。と。
を。彼。国。を。廻。り。給。予。る。よ。由。お。り。伊。太。氏。は。伊。太。祁。を。通。
ひ。て。聞。お。れ。ば。れ。り。谷。川。氏。も。早。く。韓。国。伊。太。氏。神。社。は。と。
神。名。式。小。紀。伊。国。名。草。郡。よ。伊。達。神。社。名。草。と。お。る。も。同。神。
此。社。と。聞。え。和。名。抄。小。同。郡。よ。伊。太。郷。あ。り。此。社。を。国。史。小。
承。和。十。一。年。十。一。月。奉。授。紀。伊。国。從。五。位。下。伊。達。神。正。五。位。
下。嘉。祥。三。年。十。月。紀。伊。国。伊。達。神。加。從。四。位。下。貞。觀。元。年。正。
月。奉。授。紀。伊。国。從。四。位。下。伊。達。神。正。四。位。上。同。十。七。年。十。月。
紀。伊。国。正。四。位。上。伊。達。神。授。從。三。位。お。と。見。也。南。紀。名。勝。志。
よ。園。部。村。の。

東よ園部神社と云あり是ありと云有り。和ま式。伊
名抄よ苑部郷を云何。今この園部村あり。豆
豆、圀賀茂郡よ伊太氏和氣神社。何依も同神り。此社を
仁寿二年十二月加伊豆、圀伊太豆和氣神、從五位下。○伊
豆、印本駿河とあり。今一本よ依れり。伊太豆の豆字一
本氏と何。まと齊衡元年六月加伊。其を同郡よ杉梓別
豆、圀伊太豆和氣神、從五位上とあり。其を同郡よ杉梓別
神社と云何。此を伊豆誌よ五十猛神を祀る由見えれ
む。伊豆志云當郡田中村よ木宮明神あり。川津十七村の總鎮
守あり。慶長の札よ木野大明神とあり。祠傍に樟樹十三
抱許あり。膽八比大樹二株あり。末社よ小鳥と云あり。當
社を伊豆納符の中よ出と。正保二年此棟札
宮明神あり。大見十六村の總鎮守あり。正保二年此棟札
よ貞和中藤原朝臣祐義公新宮殿造立とあり。まに那賀
郡熱海村よ木宮明神あり。此を五十猛神と稱はと
あ。陸奥、圀色麻郡よ伊達神社。名神とあり。同神あり。あ
巴。陸奥、圀色麻郡よ伊達神社。名神とあり。同神あり。あ

を決あし。色麻郡よ和名抄よも出て其郡よ色麻之加万
老志よ。今作四竈為加見郡邑とあり。さて今伊達郡と云
を延喜式和名抄拾芥抄あせよ見え。環翠軒の節用集
よ見と。此を後よ此社名。其は播磨、圀饒磨郡よも射楯
よと。巴て建と。郡と通也。兵主神社二座。あ依社の祭神を。五十猛神と。須佐之男、
命あ。巴と物よ見え。陸奥、播磨ともよ郡を志加麻といふ
をり。陸奥へを移しと。りむ當圀の名所。因會といふ物
よ。此社を辻井村と云よあり。まに行矢此神を云。今を
姫路の總社よ合せ祭る。舊を八疊岩よ坐せしあり。此社
と云り。あ不此兵主神社の事ハ別よ委く云べし。此社
よ並ぼ。白圀神社といふ有。あを彼新羅と。巴渡坐る
よ由何。巴と聞ゆるも。思合さ依まはあ。白圀を斯良伎
良伎やがて斯良圀をいふ語ある由。既よ云有り。斯
社のおと圀史よ元慶二年六月授播磨、圀從五位上白圀

神正五位下。○木圀造之齋祠神等也。木圀造之。産巢日神
と見えとめ。○木圀造之齋祠神等也。木圀造之。産巢日神
此御子。天御食持命。亦名手置の裔。宮作此業を掌れ
依故。木圀名草郡。住み。遂に圀造と任まし事。上よ委
く注す。第五十段。木圀。忌。凡て某。此圀地。坐し神等
をば。其所くを治る。圀造とち。天皇の大御手。代す。齋
祠。古の御制。依事も。既上よ注す。第三十九段の
○五十猛神を。韓神と申し。義を。韓圀伊太氏神とも申し
如く。蕃圀く。小渡す。還す。給す。稱す。曾富理神を
申し。義を。皇美麻命の天浮橋。小瀬理發して。天降坐る山
此名を。曾褒里山といふ。須佐之男命。五十猛神の。埴を

舟。小作りて。渡。坐るとを合せて。思ふ。皇美麻命。此乗せ
依浮橋を。ま。と磐船。をも云ひて。此事を。第百三十七段。小
其を。虚空を。乗。して。往來。ける物。あれ。五十猛神の。乗。て
渡。坐る。埴。舟。といふ。も。同物。ふ。て。其。小瀬理發して。渡。著。給
す。依。故。小。曾富理神。といふ。御名。を負。坐る。ふ。や。師も。言。れ
居。曾。尸。茂。梨。之。處。を。有。る。曾。尸。茂。梨。も。由。有。げ。あ。れ。ど。尸。茂
の。富。と。切。まる。由。も。無。れ。ど。思。ひ。合。せ。難。し。然。ま。ど。上。の。考
小。從。て。有。べ。し。あ。お。思。ひ。合。せ。難。し。事。は。石。見。圀。迹。摩。郡。磯
竹。村。の。内。大。浦。と。云。ふ。地。を。須。佐。之。男。命。の。還。り。渡。す。坐。る
地。あり。と。云。傳。す。て。大。屋。村。と。い。ふ。地。も。唐。神。明。神。社。と。云
あ。り。祭。神。を。須。佐。之。男。命。と。云。ふ。ま。と。其。里。に。五。十。猛。神。社
あり。毎。年。此。十。月。小。海。上。と。り。唐。神。明。神。の。社。前。に。あ。れ。ち
大。浦。よ。白。蛇。の。上。る。と。違。え。此。を。桐。箱。小。納。ま。て。神。前
小。奉。る。あ。と。杵。築。浦。を。日。御。崎。と。い。ふ。上。る。物。と。同。じ。大。屋。村
の。隣。村。を。静。間。村。と。い。ふ。此。式。内。静。間。神。社。あり。志。都。岩

屋もあゝの浦ありと其圀ある門人霹靂神社の神主竹
内正芳の語にき須佐之男命の還渡ませる地を上に出
ゑる如く出雲圀安來郷あるを石見圀と云傳ふる事
いかにあまど共隣界の圀れまむかくも云ひ傳ふけ
むを然も有はあ布下ふ註ふを合せ見るはし。○宮内省
は和名抄ふ美夜乃宇知乃都加佐とほまど乃宇を切
て美夜奴知能都加佐と訓べし職員令ふ宮内省管職一
今云大膳寮四。今云木工大炊主殿司十二。今云正親内膳
職をいふ寮四。典藥の四寮をいふ。司十二。造酒鍛冶官奴
園池土工采女主水主油内掃部卿一人掌出納。謂被管諸
管陶内漆の十三司をいふあり。及奏宣御食
也。諸圀調雜物春米官田。謂供御稻田分置畿
產。謂奏者官田園池當年所佃種色目并收穫多少及氷室
諸方口味。謂除調雜物外諸事。大輔一人少輔一人大丞一

人少丞二人大録一人少録二人史生十人省掌二人使部
六十人直下四人とほ。宮内省式と合せ見て其掌る趣
を知らし。かく嚴重不定まれるを孝徳天皇の御代に
ど考徳天皇より以前も宮内省といふ名こそ無れか
かる職掌の有らむ事を開題記に委く論へるを見べし
八省此中ふ此省はう。被管の諸司此多祀を形し。神名
式ふ宮内省坐神三座。並各神大園神社韓神社二座とほ
。圀史に齊衡元年三月園神韓神竝加從三位同二年九
月。以園韓神列官社。貞觀元年正月宮内省從三位園韓神
竝正三位あど見也。御祭を二月と十二月との丑日ふ園
後丑冬新嘗祭前日と式了見也。神祇官人祭此事は預
上御辨内侍あぞ参り勤むるこを貞觀儀式延喜四時祭

式西宮記北山抄江次第お此を宮中ふ齋祠^{イキヤウ}に給へ依事
ど其外の書等小見えと^マ。此を宮中ふ齋祠^{イキヤウ}に給へ依事
は。内侍所御神樂式よ。韓神之事。素盞雄尊子也。有帝基安
泰之誓。故宮中祭之^ヲと有れど。何れ御世といふ事知れり
ら^ズ。然れど令を御撰ありし始と^マ。猶舊りるべき事
を言はくも更ありさて韓神を古事記よ。大歳神の
御子とあるふ。此式よ。素盞雄命の御子とある事いと珍
とく正しき傳お^マ。下ふ引く。大歳神御記の傳を合せ
考子て韓神曾富理神と申^マ。江家次第此頭書ふ。件神
五十猛神お依事を辨ふべし。
延曆以前坐此遷都之時遣官使欲奉遷他所神託宣云。猶
座此處奉護帝王云く。仍鎮座宮内省とあり。然れど。宮内
省小坐^ル事と成しは。延曆小都を遷されし程より此事
お^マ。古事談五卷よも。園韓神社本自坐^ル大内跡而遷
都之時造宮之使等可移他所云く。于時託宣云。

猶坐^ル此處奉護帝王云く。仍坐^ル。
宮内省内云くと見えたり。けりて園神の事は大倭神社
注進狀ふ。大神氏家牒曰。園神舊記云。件神者守疫神也。傳
聞大己貴命之和魂大物主神也。
園神。欽園。殖。艸木之処也。集解所と見え。韓神二座の事。
謂三枝和靈祭云。當社之事也。
太宗祕府畧記ふ。韓神者伊猛命號韓神曾保利神。とあり。
小從ふべし。あ^の祕府畧記の文。伊字の下よ。曾字を脱せ
十猛を伊太祁流と訓む證とあり。然るに己が五
猛と訓とるを誤り。さて文に意を。宮内省小坐^ル韓神
を申^マ。伊猛命を韓神とも曾富利神とも申^マ。其二名
を二座と祭^ル。依由と通也。一神此兩名あるを二座と
て。一社よ祭^ル。此を豊石窓櫛石窓神。此の類お^マ。例
有り。さて韓神二座の事も。大倭神社注進狀ふ。韓神者大
己貴命。少彥名命也。兩神經。當天。下。為。顯。見。蒼。生。則。定。其。療。
病。之。方。或。抄。云。大己貴命。少彥名命。神記曰。昔造葦原中。因

訖去往東海今為濟民更亦來歸因以号兩神云韓神欽古
語外因云韓也と云へるも然る説も聞也まともも亦祕
府畧記の説も扱はくぞ所思也依儲ま師説ふ神名式
ふ伊勢因度會郡園相神社あり此を或書よ曾富理神曾
奈比く古命大歳神于也と云るハ園相字ふ付ての園
神を思ひとせよ依例の推あてろもと言れよ依の如し
ちて神樂譜ふ韓神といふ歌の其歌ふ本見志方由不
三島木綿よて伊豆因三島をり出る木綿加太仁止利加
あふべし賦役令ふ東木綿と何依を是り加太仁止利加
介よ肩ふ取挂りて禱和禮可良加見乃我韓神之ふて韓神
さて此可良加見と何依の言此如く云美と訓
法しと云へ依も有れぞ加茂翁の言此如く云美と訓
調ふ依て乃を畧れ難し加良乎支世武也韓招せむ哉
れむ訓の例とを畧れ難し加良乎支世武也韓招せむ哉
御神樂式よ加良於幾座置也とあるむ加茂加良乎支世
大人此神遊考よ論をまよる如く非あり加良乎支世
牟也言句ふ定ゆれく且末の句をか末也比良天乎ハ葉
く返し哥ふこと古哥此常あり末也比良天乎ハ葉

あり大嘗祭式よ葉天耳止利毛知天手よ取持和禮可良
盤比良氏と有あり加良乎支世武哉加良乎支世牟也と
加見乃ふが如し注加良乎支世武哉加良乎支世牟也と
の也此二首此韓招む空招禱をかけて言牙依ふて招禱
言の意を既よ第四我は三嶋木綿を掛けハ葉盤を取持
十四段よ委く云也
ち捧げて神招禱を依を決免て禱ふ驗あらせむ空招禱
は爲じ我を韓神の如く韓招は爲じと云ひ挂と依あ也
然まバ此神は韓招まる神といふ古傳の何るふ本抄き
て詠免る歌と通え免也躰源抄よ私云から字免を枯と
此試樂執柄家ふて行を依時人長枯よ清暑堂の御神樂
事あり是祕藏の事ありと云へ也按ふ此をのら字ぎ
と云ふ語よ付て時よやり後拾遺集よ資長朝臣藏人ふ
ての景物よ持とるふや

る侍々る時。園韓神の祭此内侍モネ催ルひとて。祓ヒ去ルまど。此
 世の神を驗ヒおんれむ。此世の神と云むが如し。神と云むが如し。そ此から神
 ふ祈らむと云て侍ケ返ル事カふと然レ。少將、内侍、近キきど
 ぶ死シの怨ウ禳ギを何ウそ此カから神ガまでを遠く祈らむと何
 依モも全モ韓ハ国ノの神と爲シと依サ趣セおヒ。長マと辨ハ、内侍、日記カ、建
 大納言、実房、夜番、ふ参りて、例の番おどは、おのぢうらあ
 しとも参り給ひ然ルむいと淋シく候ひ給ひしよ。きヒ
 みんノ程ハあ、あみて、れノ然ラあら、見返ヒひしよ。きヒ
 て、おざとあらぬ。何トおき様ハ。韓神をキきちどハ歌ヒ
 去ル、出給ひしや。少將、此許コり申ス扱ルは、して侍ハれ
 む。韓、内侍、きうむや、お倭ハもあ、然レのら、戎シの身ハおし
 物ノら、韓を死シのか、牙ハも、返シ、少將、内侍、や、まトも有ラら、然
 同ジ意ハむ。牙ハちて此神の韓招ス去ルとは、何カ依ル事を云ハら
 此哥ハれり。

むや考ふ依よ。前段ふ。須佐之男、命の御語ふ。韓郷之嶋者。
 有リ金銀。於ニ吾カ兒ノ所御之罔。不有ラ浮寶則未佳也。と詔ス牙ハむ。
 其荒魂大禍津日神亦名五。此御心お依グ。凡ソ須佐之男、
御言む。其荒魂の御心御態と隔チおく察シ奉ル。命の御態、まト
る言ヒき由ハは、前クむ往ク云ハるを思ふべし。仲哀天皇の御
 世ふ。神此御誨あヒて。韓罔字征給ふ言ヒき由を詔ス牙ハむ。
 即須佐之男、命此。此御語の結びて。其御誨此はふク。
 韓を征伏牙給ひし以來。三韓を更メあり。諸蕃罔クをヒ。種
 種の事物ども此。參渡ヒ來ル事としも成然ル。其本を云
 牙ハむ。五十猛神亦名韓神。此蕃罔クを。皇美麻命ハ寄セ給フ
 ぶ御心をヒ起ルる事おまむ。韓神の蕃招シ給ふと云ふ

古語の有るむ事知れし。此不仲哀天皇卷ふまに因ふ園委く注を見るべし神此事を言はる。上ふ引ふる大神氏家牒ふ。大物主神も坐て。疫病を鎮止給ふ由云。依て。案も然るべし。大神氏て大物主神の御末あまむ其は此神物主と爲て。万れ鬼正き扱ありてぞ記しむ。神を治給ふば。大宮中ふ。然依邪鬼アレキモの入依を禁給む。む爲ふ祭られむ。一、己と理を立て言むるハ、韓神園と序次べきハ、園韓とある殊も此大神も。依と蕃國を招て。大皇國も寄給ふ事を掌給へむ。此を崇神天皇卷も注ふを見と。あち此大神の事委くは第九十五段第百二十八段此傳れど。注ふを見て知れし。抄ふ。大治二年二月十四日。園韓神社。神祇官八神殿。并内

外院門垣等焼込云く。園神韓神御正體奉取出之。但後日兼俊宿禰云。八神園韓神自元無御正體。但園韓神有神寶。劔梓云く。まゑ長秋記了。大治四年三月廿一日。參院仰曰。去夜本院御夢想有老人稱宮内省住人申云。近日居住近邊。雜人等亂入甚難堪也。此事可令訪語也。今朝被尋之處。被園并韓神二社入夢驚申歟。件社焼込後。未突四面垣仍雜人等亂入とあり。はと園大曆文和四年十一月十九日。天陰。園韓神祭社壇顛倒。其後無沙汰。五節又同日無沙汰也。見也。康富記ふ。應永廿六年二月五日。大風。園韓神御社顛倒ともあり。朝野群載ふ。此社。預十部。宿禰兼宗。社の修造を請申せり。解状もあり。

爾健速須佐出男命。到坐出雲

因簸出川上在鳥上出地時箸

從其河流下矣。於是須佐出男

命於其河上以爲人有而覓上

往者。河上有啼哭聲矣。故尋其

聲而往上者。老夫與老女二人

在而中置童女而撫出泣也。問

給汝等者誰耶。則其老夫答曰

吾者因神。大山津見神出子也。

吾名謂足名椎。妻名手名椎。女

名。眞髮觸奇稻田比賣也。白矣。
復問。汝出哭由者何歟。則答。白
我女者。自本在八稚女矣。爾高
志出八俣遠呂智出。每年來喫
焉。今其可來時出故泣。問給其

形者如何歟。則答。白。彼目如赤
加賀智而。身一有八頭八尾。亦
其身。生蘿及檜杉。其長度谿八
谷峽八尾而。見其腹。則悉常血
爛也。白矣。爾速須佐出男命。於

其老父。是汝出女則立奉於吾
哉詔出。答白。雖恐不覺御名則
吾者。天照大御神出伊呂勢也。
故今自天降坐也。答出矣。爾足
名推手名推神。自然坐則恐隨

勅立奉矣。

此處故云。禰神龜三年改字。斐伊とあり。是をゆり河ふも名
け於依れり。禰速日子命也。即上見とる。禰速日神あり。
は。籬の川上よて。大蛇を切給へ。依由よて。須佐之男命を
申はる。又を大蛇の霊を祭れる。うあるべし。師説を信ぐ
今云神名式。同郡。斐伊神社。此を清和天皇紀。貞
五位下。同十三年十一月。授。從五
位下。斐伊神。從五位上。と見ゆ。同社坐。斐伊波夜比古神
社と並とす。此を風土記。禰社。禰社と並べて。在神祇官

也云、る社あり。抄抄。斐伊郷宮崎大明神也と云り。お此樋社二社の中。下

依を。式小。斐伊波夜比古神と云。師の引れぬ依斐伊郷の

文も。樋速日子命坐せ、何まば。祭神知らまぬ依を。上

る樋社を祭神詳あらび。然れども式小。武藏、国足立郡小。

氷川神社。名神大月次新嘗とある社の祭神を。一宮記小。素戔嗚

命と何。今も其本宮を去り言傳子あり。はと男體宮と

も云ふ。此社を。国史小。貞観元年正月。武藏、国從五位下。氷

川、神正五位下。同七年十二月。武藏、国從五位上。氷

川、神正五位下。同七年十二月。武藏、国從四位下。氷

川、神正四位上。おど見。此国の

也。今も中山道ある大宮駅の傍小。大社にて在。此国

の

天穗日命。出雲臣。武藏、国造等祖也と見

え。国造本紀小。成務天皇此御世小。定賜子る由見えて。式

小。此国小。横見郡小。伊波比神社。男衾郡小。出雲乃伊波比

神社。まご入間郡小。中氷川神社。出雲、伊波比神社おど

何。姓氏録小。入間、宿祢、天穗日命之。此等みぬ。出雲、国小

由ある社を。通也依を。出雲、国造とゆ派。此、国造と成

ま依故小。祝子依社あるはく。覺也依も就て。氷川神社も。

彼、樋社を移せるぬらむと思はま。氷川神社の素戔嗚尊

お依も就て。其本社とる樋社をも。疑なく此神あらむと

覺ゆるぬ。神名帳頭注と云物小。氷川神社。日本武等東

勸請と云。然依説おま。日本武等東征之時と云。素戔嗚尊を

信がとし。まとの後の惣、国風土記小。孝昭天皇三年所祭。素

蓋鳴等大己貴命奇稻田比咩合三座也と云るを殊も信
ら帳よ其座敷を記され比まて一座ありし故に神
名帳よ其座敷を記され比まて一座ありし故に神
風土記を記せる程より此事は然るべし三座は元
に式外あること云も更此事は然るべし三座は元
もれど大己貴命を漫説あり當社男躰宮の大祝岩井氏
ふ傳を依古文を扶衆見聞私記と云物躰宮稲田姫命
火王子宮と何るをや扶衆見聞私記と云物躰宮稲田姫命
四月ふ將軍當社ふ參詣ありし事を記して神此由緒を
尋られしよ神主申云大己貴命ありし事を記して神此由緒を
奉る故ふ大宮と号此神むうし出雲國氷川上宮居
し給へる故ふ氷川神明と申奉ると云る由見と正あハ
妄言多記書あまむ一向主の故実お聞きありし然ば
大己貴命と云るは其神主の故実お聞きありし然ば
ま式よを一座おれは男躰宮おそ本社おれ女躰宮火王
子宮は家は式外の末社おまむ今云ても有べし神と
因ふいぢは式外の末社おまむ今云ても有べし神と
富士の末社よも有て詳らび又按ふ火王子と云神と
神此王子と云意ふて即須らび又按ふ火王子と云神と
佐之男命此御子らむ須らび又按ふ火王子と云神と

川上老師云

加波乃弁と訓

此を加波加美と訓法し其故を同風土記ふ出雲大川源
自伯耆與出雲二國堺鳥上山流出仁多郡横田村即經横
田三處二澤布勢等四郷出大原郡堺引沼村即經來次斐
伊屋代神原等四郷出出雲郡堺多義村經河内出雲二郷
北流更折西流即經伊努杵築二郷入神門水海此則所謂
斐伊河下也云々自河口至河上横田村之間五郡百姓便
河而居門水海入流仁多郡大原郡○此大河の下古に神
に流變りて今を伊努郷より東方を流て因中此入海ふ
入とあはちて此入海を因中を東を西を遠く入海ふ
海よて昔を渚海ありしを肥大河の流入る故よま仁
その河水よ衝れて今を渚入ら或淡海ありとそ
多郡室原川源出郡家東南卅五里鳥上山北流所謂斐伊

大河上也。まと同郡横田川源出郡家東南卅六里室原山
北流此則斐伊大河上。おど有を見まむ。鳥上は此源をま
はあ也。万葉五卷。許能可波加美爾。まと十四卷。可波
加美能あどあ也。此を川上てふ言の證あり。○在は那流と訓べし。字
も辭も万葉外ぞ。例多し。尔阿流の切也。○鳥上之地也。
師云。まと彼風土記。仁多郡鳥上山。郡家東南三十五里。
伯耆與出雲之堺と見え。右よ引る處も見と依ぐ如し。
此山今俗よを船通山と云ふ。此山の東ふ室原山あり。其間を越れば伯耆国日野郡よ至るとぞ。○箸和
名抄。唐韻云。筋匙也。字亦作箸。和名波之也。あり。箸てふ端まご柱の波之とも同言あり。其を去てよ。第五段よ注するを見るべし。○從其河也。師云。今

語あらば。從其河上と云。依きを如此云。依を古語のいま
れ也。從を袁の意ぞ。姓氏錄佐伯直條。青菜葉自岡邊川
流下。天皇詔。應川上有人也。云々。繼體天皇卷。歌。小鞆都細
能。寄婆。庾那。峨。例。俱。屢。あど。あ。る。皆。同。じ。言。あ。也。まよ。萬葉
あどの哥よ。從此鳴度や多く詠るも。此をり。と云意。ふを
非也。此を鳴度ると云意あり。古今集春下。清原深養父。哥
此詞書。ふ山川をり。花の流ま。ゆを詠。ま。と。源氏須磨
卷よ。沖をり。舟ども。此歌ひ。め。あり。て。漕。行。あ。ど。云。こ
れらも。み。あ。同。○以爲人有。而は。人有。祁理。登。以爲。而。と。訓
じ。あ。と。あ。也。○祁理を。推。度。て。定。む。る。意。○覓。上。往。者。は。麻。岐。上。理。伊
傳。坐。志。加。婆。と。訓。は。し。○有。啼。哭。聲。矣。を。禰。那。久。聲。伎。許。延
伎。と。訓。は。し。有。を。字。の。ま。ふ。禰。那。久。は。音。泣。あ。也。應。神。天

皇卷小海人乎。因已物而泣也。おぞろ也。泣雀鴨泣耳師所
哭。哭者泣友おど。○老夫を意伎那と訓法し。和名抄小翁。
いと多く見ゆ。孫恠切韻云。老人也。和名於岐奈やあ也。まゝ古老於岐奈
木奈とも見ゆ。日本紀云。老公老。比止耆宿布流於
夫長老おぞろ。於伎那と訓法。けて於伎那といふ言義
は。於伎を息。那を長ふて。命長き人を云ふ稱ある事。既小
第十段 注るが如し。○老女は。師云。意美那と訓法し。新撰
の傳 字鏡小娘於彌奈と云。娘を字書し見え。び字の躰を思
字鏡小娘於彌奈と云。ふ。お老女の意。此和字ある法也。
續紀十三。紀。朝臣意美那と云。ふ。婦人。此名も見ゆ。抑老
女を意美那と云は。少きを袁美那と云を對ひて。大を小
を以て。老を少とを別て。依稱あ也。まゝ伊那那岐伊那
那美おどの御名也。

例を思ふ。意伎那。意美那。伎と美
と。戎以て。男女を別て。稱あるべし。けて和名抄。説文
云。嫗。老女之稱也。和名於無奈と見え。日本紀。小老婆。老嫗。
老女。かの續紀十三。お依紀。朝臣意美那をも。同紀五。お
音。那と云。まゝ家原。音。那と云。も。同卷。お見也。土佐
日記。おねき。おおむ。おと云。も。老夫。老女の意。は。と。万葉
あり。然るを注。小翁。おる女と云。依。お誤あり。は。と。万葉
小嫗。靈異記。お嫗。於。那。おぞろ見え。と。依。お。中古。おゆ。え。て。
美を音便。お年とも。宇とも。云。おれ。せる物。お也。是。まゝ。袁美
那。字。も。後。お。袁。年。那。お。母。袁。宇。那。とも。云。と。同例。お也。意
袁。と。を。以て。老。少。を。別。お。こ。とは。祖。父。母。を。意。知。意。婆。や。云。
ひ。親。の。兄。弟。を。袁。知。袁。婆。や。云。類。あり。然。る。お。後。世。意。袁。の。
仮。字。乱。き。て。を。り。是。ら。お。法。て。分。れ。お。ゆ。よ。と。云。又。師。お。
万。葉。お。撫。あ。お。と。て。老。女。お。於。與。那。と。訓。法。し。和。名。抄。お。於。
無。奈。も。無。お。與。の。誤。お。ら。む。お。云。お。於。れ。お。心。得。○。童。女。お。
お。凡。て。於。與。那。と。云。お。と。物。お。見。え。お。事。お。し。

師云袁登賣と訓はし。袁登賣のおと上小見也。女と書る
ていまだ成長らぬおと聞ゆまぎ下小御合ませ書紀ふ。
る事あれむ。あくもむげよいとさかたふハ非じ書紀ふ。
少女幼女幼婦万葉六小。渙童女あど見え。和名抄よ小女。
和名乎止米童女同上と有まむ。童お依字も袁登賣と
云お也。まと和名抄よ童女。女乃和良倍書紀五小童女と
の郷名よ童女と書て。まと宇那章とも訓はし。万葉十六
乎無奈と云るも有り。まと宇那章とも訓はし。万葉十六
小童女波奈理。和名抄人倫部。老幼小。髻髮和名宇奈爲あ
ど有まむお也。髪を以て称ぶこと。総角目刺あどの○中
置而は中爾須惠氏と訓べし。兒万葉十一人祖此未通如
○撫之泣也。加伎那傳氏泣那理と訓むはし。古事記了

はあぐ泣と何依を記傳ふ。泣那理と訓て言れしは。此那
理也。古文の辭はひ字能知らむ人。わきま牙てむ。下の
喫を久布那流を訓るも同じ。凡てかゝる那理那流を見
死よ添る辞あり。あくを老夫老女のうへ字須佐之男命
の見とるふ方と也言下。の喫を遠呂智がう牙字老夫此
見る方より言あり。此辞中古の物語文あども常。○誰
多うれどあぶざ也。よ見。故よ心おかくる人れし。○誰
耶也。多禮曾や訓はし。師云是を多曾と訓むをわろし。已
礼を多と云む。れ。然依事あれ。○吾者也。阿波と訓は
ど曾は必濁べきを清む。心得也。○吾者也。阿波と訓は
し。凡て自称と死の吾字。我字。僕字。あどを夜都加礼と訓
さる言あり。あく阿礼。於能礼と云し。あり。夜都加礼と
と云語の意也。清寧天皇卷ふ出と。其処よ云へし。○因
神。おは大山津見神よ係也。て聞ゆまぎも。書紀ふ。吾是因

神號脚摩乳と見え。はと吾圀神名猿田毘古大神也。ま
吾圀神名井氷鹿あどゐる例ふ依れむ。自稱ふあ也。ば此
よて姑く。ちて圀神やむ。師云。高天原ふ坐神を。天神と申
讀絶べし。ちて圀神やむ。師云。高天原ふ坐神を。天神と申
はふ對子て。此圀ある神を云あ也。天神地祇を疑ひあり。
但し何事も此圀ふて言あとれ依故。天神とは申せざ
も。圀神とは徒うは言は。卷首よ。五柱天神を。別天神と
七代神を。あぐ神世七代と云。圀神とを。あぐ天神ふ對
て。圀神世とハ云。是そ意ぞ。圀神とを。あぐ天神ふ對
ふとれれみ云。稱あ也。此も天を。降來坐る神子對ひて
申言あり。右よ引る猿田毘古大神も然也。まと迹く。藝命
の詔ふ。必圀神之子とゐるも。天神の御子あら
まの意あり。○大山津見神を。上ふ出と也。第十六段
見ふべし。○足名

椎手名椎は。師云。奇稻田比賣を撫愛し。みおる由れ名よ
て。足撫豆知。手撫豆知の約也。依あ也。傳豆を切む。ちま
ば是を。比賣れ。須佐之男命。比御妃。子爲給ひて。後ふ御親
を思ひて。稱しものぞ。然らざれば。子を愛みおる由。字本
む今此。吾名とて。名告ある。む前後違ふ。似とれ。然ら
て後を。以ま始。子も同らし言ハ。古傳の常あま。ば。妨あし。
ちて足と手やを分て。父母ふ當あ依。よは意あし。石根拆
とを分て。石拆神根拆神と云如く。足手撫と云。こを分
て。負とるのみれり。但し足。以て父。負とるハ。古。は手足
や。は云。を。で。足手とぞ云々。む今も。椎を借字ふて。野椎あ
足手纏あど。む。足を先よ云。あり。椎を借字ふて。野椎あ
どの如く。某豆知と云。例あま。と有て。上。第十三段。野椎ふ
云。依如く。豆は之。ふ通ふ辭。知を稱名れ也。書紀。下見。べし。泥

みて、知を乳養の意と比る也。例字も考るべし。古言、躬をも
知らぬ。辟説れり。乳養を乳とのみ云て、聞えむ物なり。ま
と父よ。乳養を以て。○妻名女名上。此老女は妻なり。童女
て名なり。む物なり。○は女なりと申せ。依言無れど。自ら妻子と知依く故。小
直ふ如此を申せるなり。○眞髮觸奇稻田比賣。古事記よ
比賣とあるを、今を
書紀、一書ふ扱れり。眞髮觸を。奇と云む。發語なり。眞髮
を稱する言。櫛は髮ふ觸る物なり。如此冠らしむ。彼薦
枕高皇産靈神天疎向津比賣命。如く。神名も發
語をたぐは。上代の文此状なり。師云。奇は美稱なり。例を
櫛八玉神。櫛石窓神。櫛御方命。猶多加也。稻田は。師説
此如く地名なり。其由を下
故徒ふ稻田比賣とも有也。然

依を久志とゆ。連く故。志は伊の響有て。お此扱のら。那
陀云。依まば。名田とも有也。猶下。第七十一。小注ふを
見依べし。ま。按ふ。櫛戴。其能登。固能登。郡も。○自
本師云。お。常。固。云。と。聊。異。お。して。俗言。元來と
云意あり。○八稚女。師云。夜。衰。登。賣。と訓べし。書紀。お。往
ハ。箇。少。女。と書。ハ。例の。多。死。を云。依。よ。て。幾。人。も。有
し。意。あり。は。し。白。袴。原。宮。段。は。七。媛。女。日。代。
れ。る。は。き。を。此。方。此。古。書。よ。を。通。用。ひ。多。め。○高志は。地名
あり。和名抄。出雲。国。神門。郡。古志。と。依。是。あり。名。義。を。
風土記。古志。郷。即。屬。郡。家。伊。弉。那。彌。命。之。時。以。日。淵。河。築

造池之爾時古志因人等到來而爲堤即宿居之處也故云
古志也まと同郡狹結驛古志因佐與布云人來居之故云
最邑其所以來居者說如古志鄉也と云
て池を造りし時よ越國入佐与布等來りて堤を築き即
宿れりし処おまバ越國の名を取て狹結驛と号ひ遙き越國
に來り宿る故を意宇郡母理郷の傳よ大穴持命越國の八
河比賣を還坐へると記し古事記よ八千矛神高志因此沼
越人の出雲子上依りて神あり彼神此平給ひし因おま
頭城郡沼川郷奴奈川神社も有り出雲風土記抄よ古
志郡家者從今弘法寺六町西北田疇俗呼言郷所蓋是也
井古志芦波知井宮等以爲一郷又云日淵河者蓋芦波与
明神爲氏神此社者在佐知石川と云ひ古志郷以保知石大
栗皮塚田淹之圈山是則伊佐那美命也と云へり古志中
郡家も通度が文よ依るよ神門川の東よ有り今の河流

た変とる ○八俣遠呂智 師云八俣之と之を添て訓を
もとの如く小 八俣を次小身一有八頭八尾と云る是
云るの如く 八俣を次小身一有八頭八尾と云る是
也。云るの如く 八俣を次小身一有八頭八尾と云る是
尾各有一八岐と云云 遠呂智は書紀小大蛇を書也和名
抄小蛇和名倍美一云久 日本紀私記云乎呂知と云る師
今俗に云く尋常あるを久知奈波と云ひや大なる
を幣毘と云ひお大らぬ依り字波婆美といひ極大なる
ぬる多蛇と云るに遠呂智と云俗名義青呂智と云ふ言の
小蛇と云はありあるをぞ云るに俗名義青呂智と云ふ言の
阿の省か正遠小也 師云尾於於於於於於於於於於於於
を棘驚くおどき 同言おめりて其於て遠此韻よあゆ呂
了省に尾中おしも含持まば其威聖おて餘所と上あ
き靈劍を尾中おしも含持まば其威聖おて餘所と上あ
尾を殊にいうめさくおせりし其威聖おて餘所と上あ
を名も負せしあらむと説きおる理 青呂智と云俗小青
を然もと聞ゆると猶然もを説きおる理 青呂智と云俗小青

野呂智ノロチ云蛇ヘビ了ハシて。此を青呂智といふ国クニ多オホシうれむお
也。其コノ尋常ヨシトシも倍ツヨク毘ヒと云イハばうハ也。此物コノモノをり。大蛇オホヘビと云イハばか
り。其の物モノまで弘ヒロクく云イハる。越後エチゴ国クニおどの人ヒトも。ままと相摸アヒマ
国クニ大山オホヤマ辺ヘの人ヒトおども。然シカ称ナヅケふを聞キき。猶ナカああう云イハる。国クニ多オホシ
うるべし。出羽デヱ国クニ此コノ秋田アキタ庄シラ内ウチ辺ヘもて。青アヲ此コノろちと云イハふ。
江戸エドあどよて。抑ソグ蛇ヘビの類タガヒ此コノ多オホシう。此コノ蛇ヘビをシも。常トシ
青大將アヲノオホノシラをいふ。抑ソグ蛇ヘビの類タガヒ此コノ多オホシう。此コノ蛇ヘビをシも。常トシ
小草村コノクサノムラの中ナカお在アるも。餘ホカ此コノ蛇ヘビ等トモとゆいは。平穩ヘイオンも長ナガクくオシく。
人ヒト小害コガイを爲ナスおせぬ。餘ホカ此コノ蛇ヘビ等トモ此コノ如ナドく酷ガクしのらび。青大將アヲノオホノシラ
かく穩ユキも老オホ成ナげお。然シカまどもゆいは。此コノ蛇ヘビをシるハ也。大オホおある
る故ユヅリ云イハる。然シカまどもゆいは。此コノ蛇ヘビをシるハ也。大オホおある
をシるハ也。俗ソコ小宇波婆美コウハハハミ云イハふ。大蛇オホヘビと云イハる。蛇ヘビの有アる状カタを探ウツメ
ゆいは。皆みなお此コノ蛇ヘビの大オホ小コト成ナれるハ也。其コノ餘ホカ此コノ蛇ヘビ此コノ状カタあるハ也。
聞キくハ也。かく大オホお此コノ依ヨシ性シヤウの物モノお氣ケふハ也。自オノから小蛇コヘビの

時トキも。然シカしも害ガイを爲ナスさハ也。老成オホナレり依事ヨシと思オモゆるハ也。俗ソコ
宇波婆美ウハハハミと云イハる。常陸トコノ下総シモツツノあどの人ヒトを。袁加婆美エンカハミと云イハる。
出羽デヱの秋田アキタあどよて。宇加婆美ウカハミといいふ。其コノを於オケ加美カミと
同ドウじにういは。彼カノ高タカ龍リウ神カミの御末ミノシラありと思オモふ。由ユあり。此コノ袁エン呂リ智チをシるハ也。
らび。彼カノ高タカ龍リウ神カミの御末ミノシラありと思オモふ。由ユあり。此コノ袁エン呂リ智チをシるハ也。
然シカれも袁エン呂リ智チをシるハ也。青アヲ小呂コノリてふ辭ハジメ此コノ添ソヘゆいは。阿アの省シヤウ也。
多オホシう語コト。智チは師シ説セツ此コノ如ナドく。例タガヒの稱名ナヅケあり。下シタ小須佐コノスサ之ノ男ヲ命ノミ
也。御言ミコトコトふ。汝カレ者ノ可カ畏コソ神カミ也ナリ。と詔ミコトコトひ。ままと欽キチ明天皇ミナカミノミコ卷マキふ。狼オホカミを
也。貴神カシキカミと云イハふ。虎コノをシるハ也。威神カシキカミと云イハる。言コトあるハ也。如ナドく。かく依物ヨシモノ
字ナリも稱ナヅケたり。智チとは云イハる。此コノ也。蛟カマあどの智チも同ドウじにゆいは。して
るハ也。○來キ喫ク焉ナリ。伎キ氏シ久ク布フ那ナ流ルと訓ナヅケは。師シ云イハる。出雲風デヱノカゼ
土記ツチノキふ。神門カミノカド郡ノ來キ食シ池チと云イハる。也。ままと何ナニれ由よて名ナけ
しハ也。ままと何ナニれ由よて名ナけ
しハ也。ままと何ナニれ由よて名ナけ

同じきゆき引出於○今云こた高志郷と同じ神門郡ふれむ遠呂智の來て喫りる由の名あらむも知べくら久比と訓はし鶴あり垂仁紀よ譽津別皇子見鶴得言云云鳥取連祖天湯河板拳遠望鶴飛之方追尋詣出雲○今而捕獲云く此事此所由ある池あるべしとい子也○今其師云其とは上の遠呂智を指て云ふ古言なり○漢文よ云其と

格異 ○赤加賀智古事記本注ふ今酸醬也なり○書紀

赤酸醬と書て此云 和名抄よ兼名苑云酸醬一名洛 和名保く都岐せあ也師説ふ名意は赤赫都窠もて都美を切て智と云れ也字鏡よ酸醬加我彌吾又奴加豆支とあり

加我彌を赫窠あり和名抄よ蟒蛇夜万加 せ言れと也然まぞ今れ現よ山加賀智せも赤加賀智とも云て赤黃斑

あるが腹を殊よ赤く目は血を沃ぬ依如く赤蛇有也赤赫智の義あるはさて此て凡て青呂智とを異りてかしよく強気き物あるが又いと大あるも有せ云へ也

此ふ依て按ふよ古事記の本文此意は青呂智此目は赤加賀智とい蛇蛇此如く血走也と云意の古傳あり

んむを名此同じ蛇故ふ酸漿此事ぞせ心得て今酸醬也

せ云註字加ぬるよを非じり斯むかり大なる蛇の目此赤く恐し蛇を譬へ言むふ酸漿は似於うはし有ぬをも思ふべし越後国蒲原郡小関村ある教子上相篤興が語の朽とる空ふ年久しく腕の太さむりあ赤加く知れ住て時く頭を出れ木竹を刺入れぬ童子ども打てゆて其空子あきり木竹を刺入れぬ童子ども蛇の打てけり斯て其を引出して切散しぬ依る尾ふありし骨

の三四寸許、あるが、鏤たりも剛く、又扱く、取て、木竹、削依、いと能く、切らま、濡る、紙さ、牙、取れるを、奇し、人、見、依、江、戸、人、の、來、相、て、そ、字、買、取り、去、れる、事、あり、後、此、古、学、小、入、て、遠、呂、知、の、尾、よ、聖、劔、の、有、し、事、お、ど、思、ふ、よ、我、が、買、取、ざ、り、し、事、此、口、惜、し、と、云、り、由、有、げ、れ、る、こ、ぞ、あり、○、さ、て、序、小、云、む、酸、漿、の、案、を、保、く、都、岐、と、云、む、頰、突、れ、奴、加、豆、支、を、額、突、お、り、彼、案、此、枝、小、付、る、状、田、く、て、人、此、頰、を、扱、き、額、を、突、る、如、く、見、成、さ、依、れ、む、○、八、頭、八、尾、は、師、云、加、茂、翁、の、加、志、良、夜、都、む、云、る、お、ら、む、○八、頭、八、尾、は、師、云、加、茂、翁、の、加、志、良、夜、都、袁、夜、都、を、訓、れ、扱、る、ぞ、皇、国、の、物、言、れ、依、○、蘿、を、許、祁、お、す、万、葉、小、多、く、此、字、を、書、す、和、名、抄、小、切、韻、云、苔、水、衣、也、亦、作、落、和、名、古、介、と、何、す、蘿、を、別、よ、出、し、て、唐、韻、云、蘿、女、蘿、也、雜、要、訣、云、松、蘿、一、名、女、蘿、和、名、万、都、乃、古、介、と、も、有、れ、ど、此、の、蘿、を、谷、川、氏、云、許、祁、許、祁、よ、用、ひ、と、す、木、毛、あり、○、檜、杉、此、事、は、

既、よ、註、へ、此、を、書、紀、ふ、を、松、栢、生、於、背、上、と、何、す、和、名、抄、語、抄、云、字、亦、作、榕、和、名、萬、都、栢、兼、名、○長、は、師、云、那、賀、佐、と、苑、云、一、名、櫛、和、名、加、閉、と、い、す、り、○長、は、師、云、那、賀、佐、と、訓、考、大、き、廣、さ、深、さ、お、ぞ、云、格、の、辞、を、奈、良、ま、で、ふ、を、正、如、此、訓、考、大、き、廣、さ、深、さ、お、ぞ、云、格、の、辞、を、奈、良、ま、で、ふ、を、正、ま、本、草、お、ど、立、る、物、よ、云、こ、と、れ、り、蛇、お、ど、は、横、よ、長、き、物、よ、お、そ、有、れ、高、く、立、物、よ、は、有、○谿、を、和、名、抄、小、爾、雅、注、ら、祢、む、多、氣、と、云、べ、き、由、あり、云、水、出、山、入、川、曰、谿、又、作、溪、和、名、多、爾、水、與、谿、相、屬、曰、谷、猶、谿、也、と、何、す、○、峽、を、師、云、袁、と、訓、考、き、お、ぞ、谿、八、谷、の、例、小、て、明、く、尾、小、此、字、を、書、る、例、を、懿、德、天、皇、紀、よ、曲、峽、宮、神、功、皇、后、紀、よ、活、田、長、峽、因、お、ど、何、す、○峽、を、和、名、抄、小、峽、山、間、峽、る、如、く、お、ま、む、尾、よ、を、非、だ、但、し、荆、州、記、よ、三、峽、七、百、里、中、兩、岸、連、山、無、断、処、お、ど、云、る、彼、山、の、長、く、連、れ、る、さ、は、を、取、

て尾は用ひ書紀ふた。蔓延於八丘八谷之間と書れと也。
此餘も尾ふた。畝丘頓丘あど。丸布山丸尾の事は朝倉宮
書紀了ハ多く丘字を加ハル也。丸布山丸尾の事は朝倉宮
段小委く云々。雄略天皇卷。○悉常は許登基登爾伊都
母と訓はし。○血爛也。知阿延多陀禮多理と訓はし。け
て此大蛇の形を書紀一書ふ。大蛇每頭各有石松兩脇有
山甚可畏矣と何也。幾千歳をう經てかく大子成りてハ
さす。いれとれく蘿生ひ土おきて身ハ山を成し。松栢檜杉
今も大亀の背あど。信ハ山の動き出と依如く。小そ有々。物
生て。多る。背より見て。其物とも覺ざる。状ハ見ゆるも
多る。思ひ合。はし。○是汝之女則。許禮汝之女那良婆と訓
はし。是とを童女を直小指て詔ふ御言ふ也。○立奉哉は

本よた。立字あう。しを。多氏麻都良牟夜と訓はし。師云
下文小依て加。子と。り。奉を。旧く久礼牟夜と訓也。書紀も同じ。其を吾小奉ると
云む。た。い。か。と。思。子。の。故。の。訓。あ。ま。ど。も。上。代。は。貴。人
を。自。此。う。子。を。も。等。み。て。詔。ふ。こ。を。常。あ。也。後。世。の。心。を。以
て。疑。ふ。は。き。小。非。安。久。流。と。云。言。も。土。佐。日。記。う。於。不。物。語
あ。ど。も。見。え。て。や。古。け。れ。○雖恐。を。加。志。許。氣。禮。杼。を
ぞ。丸。布。然。を。訓。は。し。き。お。何。ら。び。師云。速小諾。ハ。べき。あ。れ
訓。は。し。の。訓。よ。と。り。て。如。此。書。於。師云。速小諾。ハ。べき。あ。れ
ども。を。云。意。此。言。あ。也。か。次。よ。云。を。合。せ。考。ふ。べ。し。○不覺
御名は。師云。御名。袁志良受と訓はし。是はいうある御方
う。母。知。ら。び。と。云。意。あ。は。は。し。ま。と。上。古。う。た。女。を。嫁。ひ。る
あ。ら。ひ。う。や。も。思。子。ど。御。答。お。御。○伊呂勢。末。う。た。伊呂兄
名。告。れ。り。ま。む。上。の。意。あ。る。べ。し。○伊呂勢。末。う。た。伊呂兄
を。書。と。也。師云。同母兄を云ふ也。伊呂を。本。愛。し。み。親。み

て云言あり。此事淨穴宮段。常根津日子伊呂泥命の下よ
委く云はし。考すてよ。加茂翁説。伊呂を家等よて。万葉
十四。東哥。伊波呂と云る。是れり。
はて同母の子と。母と共よ同家。在る故よ。伊呂母。伊呂
兄。伊呂弟。伊呂姉。や云ありとあり。是ぞ古の趣を。とく得
られ。とる物と。先。おを思。はて此命は御弟。おまとも。男命
ひし。り。ぜ。非。ざ。り。ぬ。に。は。て。此。命。は。御。弟。お。ま。とも。男。命
れ。依。故。お。兄。と。詔。ふ。お。に。其。由。を。上。お。云。に。第十一。段。我。那。勢。命。と。ある。下。
見。る。上。よ。天。照。大。御。神。の。大。御。言。よ。も。我。那。勢。命。を。あり。第三。段。見
十二。段。見。る。べし。○恐。む。師。云。訶。志。許。斯。と。訓。は。し。下。よ。天。尾。羽。張。
神。の。答。お。恐。之。仕。奉。と。見。え。は。と。言。代。主。神。の。語。お。も。恐。之。
此。因。者。立。奉。天。神。之。御。子。を。見。え。ま。ぬ。穴。穗。宮。段。よ。恐。隨。大
命。奉。進。お。ぞ。あり。と。同。じ。語。格。お。に。速。お。諾。して。承。る。詞。お

に。今。世。言。よ。承。諾。は。る。を。加。志。許。麻。理。申。多。と。云。ひ。奉。畏。候
仁。德。天。皇。紀。播。磨。速。待。が。哥。お。伽。之。古。俱。等。望。阿。例。椰。始。儼
破。務。と。ある。よ。と。く。似。と。る。趣。お。れ。は。加。志。許。久。斗。毛。と。訓
べき。り。や。も。思。す。り。そ。を。賤。き。女。を。奉。む。を。恐。○隨。勅。を。書
く。と。も。れ。り。然。ま。ど。も。猶。前。の。方。お。を。る。は。し。○隨。勅。を。書
紀。小。據。て。補。す。に。美。許。登。能。麻。く。邇。く。と。訓。べ。し。立。奉。於。吾。哉。と。詔。へ
る。御。言。を。指。て。云。り。○立。奉。は。師。云。多。氏。麻。都。良。牟。や。訓。は。し。如。此。書
依。例。を。右。お。引。る。言。代。主。神。の。言。ま。ぬ。木。花。之。佐。久。夜。毘。賣。
段。お。も。あり。に。立。字。を。添。と。る。故。を。は。お。多。都。と。ば。り。に。も。物
を。獻。る。お。と。麻。都。流。と。ば。り。ゆ。も。獻。る。お。を。お。て。多。氏。麻。都
流。と。云。を。本。其。二。を。重。補。ある。言。お。に。は。と。獻。依。を。麻。陀。須
や。云。依。を。お。に。其。多。氏。麻。陀。須。と。も。云。依。を。その。多。氏。も

爾速須佐出男命以其童女取

同じ。今云多氏麻陀須てふ言の師説て第百ちて奉字は。多氏麻都流とも訓どもはと常ふ麻都流とはの也ふも用ふる故もかく立字を添ても書るあ也。獻は字立とたり云はゆえ大神宮儀式。六月十七日夜。佐古久志侶伊須く乃宮仁御食立止云く。御食奉る是れ也。まよ万葉一御調等六よ宮柱太敷奉あぞある此二の訓を誤とを見もれど奉を多都ともいふ言の有しから古くとりかく訓るあも一。あれらも一。の證とを委。ばくあむ。

成湯津瓜櫛而刺御美豆良而

告其足名推手名推神曰汝等

以衆菓釀八鹽折出毒酒且作

廻垣於其垣作八門每門結八

佐受伎每其佐受伎各置一口

サカブネヲテゴトニフネモリソノヤレホヲリノサケヲテ
酒槽而。每船盛其八鹽折酒而。

テヨマキアレタメニイミノテムコロソノヲロキヲト
可待。吾爲汝當殺其遠呂智也。

ラレハタマヒキ
教出矣。

湯津爪櫛の事也。上ノ既ノ注ヲ也。第十八段の○取成

は師云下ふ。令取其御手。即取成立。亦取成。亦取成。亦取成。

と同く。此物を變化して彼物に爲す。書紀に立化奇稻

田姫爲湯津爪櫛而挿於御髻と書まゑる化字よて明し。

古來この立化二字をタチナガラと訓むを當らば立一字をさも訓べしさて化字と下あは爲字とを合せてと

言ふ當れり。然ま尤是は比賣の身體を櫛に變化して須

佐之男命此已命の御美豆良小刺給ふ也。然るも中古々

稻田姫の處女あるよそひを化て櫛を其髻にさして須

佐之男命此御妻小し給ふありと云ひ或は須佐之男命

此稻田姫の形に化て櫛を爲すて御髻に付て如此く爲

給ふ所以はいろれる事知がぬし。清輔奥儀抄に櫛に

取成て蛇を見せしや爲給ふゆふや爪櫛に悪鬼のお

おる物了て侍るふこそ。同紀にも醜女了追れて逃るふ

ゆぢあくて懷て爪櫛をと出て打はく。其時醜女追

さして返す。と云は事ありや云也。但しおちて追さし

如此る由もや有む。○御美豆良を上り出拔第十八段の傳見る
○衆菓は母く呂く能許能美と訓べし。和名抄ふ。漢書
注云木實曰菓日本紀私記云古乃草實曰菓和名久佐乃
の也。○八鹽折を師云書紀ふ八醞酒と書す。醞釀酒也と
も久釀也とも。字書よ注せす。はと和名抄ふ。説文云耐三
重釀酒也漢語抄云豆久利加倍世流佐介西京雜記云正旦作酒八月成
名曰耐酒一名九醞通俗文云醞酸酒切韻云酸を何す。今
此を師の引れあるをり少し委く引とす。さるを再釀
を下を酸と云ひ其を曾比と云ぐ此は用有ればあす。
此字夜志本袁理を云ふ所由を私記よ。或説一度釀熟絞
取其汁棄其糟更用其酒爲汁亦更釀之如此八度は爲純

酷之酒也。謂之鹽者。以其汁八度絞返故也。今世亦謂一度
便爲一鹽也。謂之折者。以其八度折返故也。是古老之説也
と云す。此説大加と宜のるは。八度折返とは古何事か
はま。回復て物去ゆ字。折と云るもや。物語文ふ。折返し歌
ふあぢあり。あは折から折節其折彼折あど云折と本同
度字一にゆ二をゆと云はと酒折池酒折宮外と云も何
ゆを思ふは折を酒を造るふ。殊も云言あるは。酒折池
天皇卷小見え酒折宮を。けて新撰字鏡ふ。醜志保留と何
景行天皇卷小見えとす。は説文厚酒也を注せり。此は依らば厚酒を造るを
志保留とは云はよや。志保留を。即志本袁留の切ます。

る言ふて。幾度も折返し釀意おほはせし。さて物を絞ると
依まよとまよと物色を染むを、一し不二と云ふと、
云も本同言よて、其を理を畧る言あらむ。はて志本を
は。酒を造るよも、其汁を云名おや有ら年。那岐大神此段
ふ塩許袁呂許袁呂迹画成てふ古言よとまよ、凝堅ま
るべき汁の意あり、さて食塩を、津より出とる名ありま
ぬ八鹽折之紐小刀と云も、其を玉垣宮段ふ云ふは
し。○毒酒を、阿斯伎佐邪を訓はし。舊訓よも、諸の菓を以
て。八鹽折ふ釀とる酒を、外布毒く酔ふはく造り給ひら
む。○釀は師説よ。酒を造るを云。古歌よまきりを見也。字
鏡よ。釀造酒也。佐介加无を注せ也。此加牟を口よて咬咀
臆度のひが言あり。加牟を和名抄よ、麴を加無太知を有
依はかびぬちよて、俗ふ花の付と云ふれあり。されば酒

もかびだくせて作る意よて、加牟とぞ有也。是ぞ正説お
も云ふあり。故加毛須とも云ふなり。依然るふ。日本決釋をいふ物よ。應神天皇之代。百濟人須
曾己利。人名。參來始習造酒之事。以往之世。未知釀酒之道。
但殊有造酒之法。口中嚼米吐納木櫃。經日酣酸。名之爲釀。
故今世謂釀酒爲嚼。是其法也。今南島人、とあるは、舊き妄
説と聞えと也。此書を、古事記裡書といふ物引とり。日
五日書写の奥書ある書よ引とれ。亦不酒を造始ぬ事。
はと酒よ要ある事どもは、少毘古那神の處ふ委く註ふ
はし。第九十三段。○垣を。師云。限あり。○作廻を。師云。縣居
翁の作母登本志と訓れぬ依ふ從ふはし。母登本志を母

登本良志米あ也。母登本留之即廻あとあ也。万葉十九
ふ。大殿此此廻の雪を踏そ祢ま大殿乃此母等保里此
あどあ也。宮段此哥あ出扱とあ也。儲あの垣を何處よ作
れや宣ふ事ぞと按ふるよ。足名椎。手名椎。神此住居此周
ふ作まとの事あるは。然るを大蛇の来るはかあらび
○作八門。此を垣此四方よを有は。うらま。決免て一方ふ
竝はて作らし免給ひらむ。其は頭こそ八あれ。身は一あ
まむ。一方ふ向ひ来る理也あまむあ也。○每門結八佐受
伎とは。師云門每ふ一扱ふて。八門あれを合せて八結
を云ふ。一門每ふ八扱ふ合せて古文よは此言て。あれあ
て六十四ふを非は。

通せと依語多し。能せばを謬れあむ。大祓詞。天津金木
千座。置座よ云くと云るも。打断ての下よ。置座よ作りと
云言を省きて。然聞せと依よ同じ。此も每門結。佐受伎。八
門合せて。八佐受伎を云て。ハ言重あ。ちて八稚女。八俣。八
依故よ。省きふ。然聞せあむものぞ。ちて八稚女。八俣。八
頭。八尾。八谷。八尾。八鹽折。八門。い扱れも。慥あ七。八の八ふ
を非で。本を多し。多犯を云る語あ也。然るを神道よ。ハ
八と云ふ説也。○佐受伎を。師云書紀よ。作假殿八間。を書
論ふよ。足らび。了。假殿此云。佐受枳とあ也。殿を閣也と字書ふ見え。はと
所以藏食物とも見也。和名抄ふ。類聚国史云。假床此間云。
佐受枳。今案假構屋。内床之名也とあ也。此等は字ふ就て
云。牙依此みあ也。佐受伎を。後世ふ物見る料よ。構ふ依。佐

自伎と云ふ物即ちあまを也。さむねに即ちさびきの訛、れ也。書紀、釈ふ今世、棧敷、欵と云り。
棧敷の字を、おしめて、よ作まる物あるを、此字は依て、さむじきと唱ふるを、甚く非あり、さじきて、ふ名を、物語文見ゆ、み多く、神功皇后、紀ふ、祈狩の處ふ、二王各居假殿、赤猪、忽見ゆ、見ゆ、出之、登假殿、まゝと雄略天皇、紀り、張夫婦、四支於木置假殿、以火燒殺、あぢも見えと也。○一口、酒槽、酒槽を佐加夫禰と訓ばし。書紀の古本、よ和名抄ふ、文選注云、槽、今之酒槽也。和名佐加布禰、と何也。古事記、酒船と書とるを、語一口は、比登久智、やも、比登都とも訓ばし。書紀、古本、よ、ヒトクチと訓み、今、本、イハヒトツ
と訓ばし。比登久智、や、訓て解くば、今酒を作ある器を槽とを
有れど、書紀、一書ふ、釀酒八甕、と何るふ就て、按ふよ、いみ

し、酒をば、加れらば、甕に釀して、其れを、居備ふる例、あまを、此時も、案を、甕に造り、むを、槽と何は、槽に釀る、あと始、して、後ふ、何う、まを、酒を、造る器を、布禰や、云ふ、慣ひ、を、形めて、此の、甕を、も、槽と書らむ。今も酒を造る器を、ば、云
ば、て、槽と、ちて、一口、れと云、ゆを、甕や、い、ふ、物、の、状を、下ふ
注ふ、如く、口、れ、數、あ、ゆ、も、有、し、ら、ば、此、を、八頭、を、八甕、よ、一、
ぢ、く、垂入、し、ぬ、む、と、の、御計、ある、故、ふ、口、一、ある、甕、ふ、盛置、
志、於、給、牙、ゆ、由、ある、は、し。凡て、か、ゆ、物、の、數を、い、ふ、漢文
口も、その、漢文、れ、ら、む、と比登都、を、訓む、は、甕、よ、を、何、
思ふ、よ、あ、ち、然、よ、は、非、じ、
ら、て、信、ふ、槽、ふ、て、一口、は、一、箇、を、漢文、ふ、書、ると、見、ゆ、べ、し、

此^ニ訓^ツ今思^ヒ決^サ絶^グ多^ク矣^シ。○教^ヲ之^タ矣^キ。衆^ヲ集^ルをもて。八鹽折^ノの毒酒^ヲを醸^ル事^ト也^ニ。遠呂智^ヲを待^ベべき構^マまでを教^ヘ給^フ牙^ハ由^リ也^ニ。

於^レ是^ニ足^ル名^ヲ椎^テ手^ヲ名^ヲ椎^テ神^ヲ隨^フ教^ヲ言^フ。
設^テ備^フ而^シ待^ツ出^ル時^ヲ。其^ノ八^ノ俣^ヲ遠^ク呂^ヲ智^ヲ。
信^ト如^ク言^フ來^ル。爾^レ速^ク須^ク佐^ル出^ル男^ノ命^ヲ。勅^ス

遠^ク呂^ヲ智^ヲ曰^ク。汝^ノ者^ヲ可^ク畏^ル神^也。敢^テ不^ス
饗^フ乎^ニ。詔^ス而^シ。乃^チ以^テ八^ノ甕^ヲ酒^ヲ。每^レ口^ニ沃^ス
入^ル出^ル則^チ。其^ノ遠^ク呂^ヲ智^ヲ。每^レ船^ニ垂^テ入^ル頭^ニ
而^シ飲^ム其^ノ酒^ヲ矣^シ。於^レ是^ニ飲^ム醉^リ而^シ留^ル伏^ス
寢^ス矣^シ。爾^レ速^ク須^ク佐^ル出^ル男^ノ命^ヲ。拔^ク其^ノ御^ヲ

ハカセルトツカツルギラテキリハフリタヒソノヲ佩出十拳劔而切散其遠呂智シカバヒノカハナリチニテナガレソノカバネハゴトニ則簸出川變血而流其骸者每キダミナナリイカツチニトビヲドリテノボリソラニキカレキリタマフ段悉化雷飛躍而昇天矣故切ソノナカノヲヲトキニミハカレノハスコシカケキ其中尾出時御刀出刃少缺矣スナチオモホシアヤシテモチテミハカレソサキサレサキテ爾思怪而以御刀出鋒刺割而

見出則別有都牟刈出大刀故ミソナハレシカバコトニアリツムガリノタチカレ取此太刀而思異物而安置御トラレコノタチヲテオモホシアヤシキモノゾトテヲサメホキミ許而齋出矣天藂雲劔是也蓋モトニテイツキタマヒキアメノムラクモノタチコレナリケダシ其遠呂智出居所出上常有雲ソノヲロチノスメルトコロノウヘニツネニアリシク氣故名歟故斷給遠呂智劔出モユエニナツクルカカレタチタマヘルヲロチヲタチノ

ナラ イフ フロキ ノ アラ タマト 亦云 天羽羽
號 謂 大蛇 出 鹿王 斬 出 劍 亦 云

アミノ 天 蠅 斫 出 劍 亦 云 此 劍 者 今 在
大 蛇 韓 鋤 出 劍

石上也。

隨教言設備而待之時。隨教言を專足名推手名椎神小係
也。設備而待を兼て須佐之男命小も係ま也。其故を信如
言とは須佐之男命此御心ふて云まむあり。○信如言來
は響ふ老夫。今其可來時と云し如く來ま由れ也。師云

書紀よむ。至期果有大蛇云くと云て。此処よて大蛇の形
状を云れむ。此も蛇の形状乃言し如くあ也と云ふ意も
あもる。○勅遠呂智曰。汝者可畏神也。上小伊邪那岐命
告桃曰。汝如助吾云くとある類ふて。切ある事は當りて
は。何ふまれ。物言かく依あ。古も今も有依事あ也。欽明
天皇卷よ。秦大津父と云人の狼よ。汝者貴神云くと云ひ。
膳臣巴提便と云人此。虎小。汝者威神云くと云依あぞ。残
思ふはし。○敢を伊加傳と訓はし。阿倍氏を訓む。○響を
既よ上小註す也。第四十二段。新嘗。○八甕酒。前段の一口
酒槽を。比登久智能佐加夫禰を訓て。實を甕を云すゆと
みむ。了は甕を和名抄ふ。亦作瓮。和名毛太非と見え。新撰

字鏡ハ。甕ハ。瓮ハともハ彌ミ加カと訓み、瓮ハ字ハを書紀ハ。瓮ハ此ハ云ハ倍ハを有ハまむ。毛ハ太ハ非ハ彌ミ加カ倍ハあや名ハを變カれども同ハ物ハあハ也ハ。今ハ世ハも大ハあるをバ加ハ米ハと云ハひ。小ハくて口ハのたぶハみ多ハく成ハ壺ハと云ハふ。然ハれど案ハを同ハ物ハあり。然ハれを倍ハとも彌ミ加カとも。毛ハ太ハ非ハも訓ハはるまど。山城ハ風土ハ記ハ。八ハ腹ハ酒ハも有ハれば此ハを本ハ。八ハ甕ハ酒ハを訓ハるハ。從ハふハ。此ハを波ハ良ハと云ハむ。實ハの名ハは非ハ祢ハども。口ハ小ハさく中ハ張ハふて。人ハ此ハ腹ハ不ハ似ハとまばあハ也ハ。今ハ時ハも土ハ中ハとハ也ハ。上ハ代ハの瓦ハ器ハを掘ハ出ハるハとをハ也ハ。有ハて。其ハ形ハを圖ハ集ハとるをハ見ハるハ。一ハ口ハあハゆる多ハうれど。眞ハ中ハふ大ハある口ハあハゆる。小ハ壺ハ此ハ如ハく。小ハ外ハも口ハ十ハ付ハある。ほハとハ同ハじ程ハ外ハる口ハの五ハ付ハとハゆるも

有ハき。いぢまも底ハ圓ハくて。直ハふ居ハれむ。傾ハき轉ハぶ物ハある故ハ。古ハ書ハども此ハ器ハを置ハことを。穿ハ居ハとは云ハ牙ハ也ハ。万ハ葉ハの伊ハ波ハ比ハ倍ハを穿ハ居ハあど。居ハや多ハく詠ハるを此ハ由ハ外ハり。ほハ多ハ前ハ外ハ不ハ斎ハ瓮ハと云ハこや。八ハ黒ハ田ハ宮ハ卷ハる注ハふをハ見ハる。段ハの一口ハ酒ハ槽ハを。比ハ登ハ都ハ能ハ佐ハ加ハ夫ハ禰ハと訓ハて。案ハふ槽ハを云ハ牙ハ也ハを見ハむふ。船ハふ腹ハと云ハあや。仲ハ哀ハ天ハ皇ハ卷ハる。船ハ腹ハ不ハ乾ハとハゆる。船ハ腹ハは。兩ハ旁ハとハ也ハ下ハ。水ハふ没ハる處ハを云ハ牙ハれむ。甕ハを借ハ字ハふて船ハを數ハふる。幾ハ腹ハと云ハへハ也ハと見ハゆるべし。○每ハ口ハ沃ハ入ハむ。大ハ蛇ハグハ。此ハ口ハおやふ外ハり。○每ハ船ハ垂ハ入ハ頭ハ而ハ云ハくは。八ハ頭ハを各ハく八ハ腹ハの船ハふ垂ハ入ハて飲ハ付ハし外ハ也ハ。垂ハ入ハ多ハ礼ハ氏ハと訓ハべし。總ハて蛇ハを甚ハく酒ハを好ハむ物ハある。況ハて口ハおやふ沃ハ入ハを給ハし。うばか飲ハ付ハる年ハも。案ハ然ハゆると

〇留伏寝矣トシテ。已レ本レ住處ヲ。是レ歸ラ。酒を飲シ。依
 處ニ留リ。酔ヒ伏シ。寝シ。依リ由ル也ニ。〇御佩ハカセ之ヲ。十拳劔ツカヅレキの事
 は下ニ注シ。〇切散セ。師云キ。伎理波布理ハフと訓ベ。水垣
 宮ノ段ヲ。斬キ波布理ハフ其軍士ト。有ル依マ。委ク。彼ノ處ニ。云
 斬ト。〇變血ニ。師云チ。知邇那理氏チナリと訓シ。仁德天皇紀六
 十七年。笠臣カサノミ。祖縣守ソノ。備中ビチウ。因リ川カハ。鳴川ナリの派カミ。依リ大虬ミツチを斬
 する處ニ。河水變血ニと見えぬ也ニ。變ヲカヘ又ト訓ルは加
 色ノ。りト。〇其骸者ニ云ク。昇天ホリノミキ矣ニ。こト舊事紀ニ。扱マ依リと
 るを云フ。〇其骸者ニ云ク。昇天ホリノミキ矣ニ。あト。徴リいテ。りキ。〇
 紀ノも私記ニ曰ク。師說ニ此蛇斬ス爲ス八段ト。即チ每段ニ成ル雷ト。總テ爲ス八雷ト。
 飛躍テ昇ル天ニ。是レ神異ノ之ヲ甚キ也ト。何レ也ト。傍ノ古書ヲ遺レるヲ採マ依リらズ。伊加

豆智ヅチと云フ。何レもまれニ。嚴イカく剛ツヨき物を云フ也ト。上ニ注シ牙ヲ也ニ。
 第十六段ノ第十八ノ。此ノ雷ヲ。天ノ昇ル也ト。有ル戎思ニふル也ト。決
 然ト龍ノもぞ有ル也ト。其ハ和名抄ニ。龍ノ和名ト。文字集略ニ云フ。能
 幽明ノ大小ヲ。登ル天ニ。四足ヲ五采ヲ甚キ有ル神靈ノ者也ト。何レ也ト。此文ノ角
 書落セりト見ル也ト。其ト下ニ。文ノ同シ。文字集略ヲ引テ。蛇ノ龍
 之ノ無ル角ノ青色也。螭ノ龍ノ之ノ無ル角ノ赤色也。と有ルを見て。漢ノ因リて。漢
 直ニ。龍ト云フ也ト。角ノ有ル也ト。然レと皇國ニ。是レは舊ニ。蛇ノ類
 有ル也ト。角ハ四足ノ有ル也ト。或チ幽カれ。或チ明カス
 也ト。大虬ノも小虬ノも變化シて。雲ヲ起シ。天ノ昇ル也ト。雨ヲまシ。
 氷ヲ降ラし。依リと委シ依ル物を。今も多ク都ト稱ス。龍ノ天ノ昇ル也ト。
 也ト。必ズ鳴ル神也。是レ雷ノ神ノ佐ト。依ル態ヲ有ルを。人ト然

依細し死事までは知ざ依故ふ。雷鳴をやぐて。龍の態と
思ふも有免也。但し斯むか也。猛く靈ある物も有まむ。
此が地も在とたむ。大きくも小くも。蛇の形も依故ふ。
倍美とも蛇をも云ふ。斯て此ある雷やぐて龍れらむと
思ひ合さ依。事は。靈異記ふ。雄略天皇。空も雷れ鳴るを。
小子部。栖輕。請奉れと詔。牙をば。栖輕馬も乘。て空も向
ひ。天皇れ。勅あ也。呼を也。追ふも。雷侘て。落と依を。捕
牙て。進れる事也。栖輕が雷を捕。牙とる事也。日本紀も
也。委くを雄略天皇。其雷の形を。日本紀もは。大蛇と也。
卷も注ふを見。然れむ。此れ傳ふ。雷も化。て有也。其
想合せて。辨ふ也。昇る時。いみじく。嘯。転。き。あ。ど。し。け。

む故も。有。ば。き。遠。呂。智。が。甚。く。怒。也。て。死。む。む。靈。の。碎。れ。
て。か。く。數。の。龍。と。化。て。昇。ら。む。也。然。も。有。へ。き。事。も。あ。そ。
●中尾とむ。師云八尾あま。端ある中尾依有也。鍊胤
永州一羊沙弥道祥が手写本と云ふ也。御刀は。即右
中尾時云くと訓て有也。と聞えと也。○御刀は。即右
此十拳劔也。○刃少缺矣。は。尾。中。小。劔。あ。依。故。ふ。其。も。觸
て。刃。の。缺。あ。る。也。○都牟刈之大刀。師云刈を伎と訓る
は。由。あ。し。都牟賀理とは。物を利く。截斷貌を云。言ふて。今
世語も。豆加理。ま。と。須。加。理。あ。と。云。ふ。即。是。也。也。大。神。宮。神
寶。も。須。我。流。横。刀。と。云。何。依。を。式。ま。と。儀。式。帳。須。我。利。劔。也。
も。云。牙。也。は。と。式。も。出。雲。国。出。雲。郡。は。都。我。利。神。社。と。云。あ
也。是。等。も。同。言。あ。り。今。云。此。社。の。祭。神。を。神。名。式。考。證。も。出
雲。臣。譜。も。伊。佐。我。命。此。子。も。津。狩。命。と。

依を片刃あるが便とき故に於となく後また大刀を
も凡て片刃に依事よをきりむ天智天皇紀三年
大氏之氏上賜大刀小氏之氏上賜小刀とあり此等の小
刀に諸刃ありし片刃ありし知のよしはと武烈天
皇紀の哥小飲衰陀擲とあるハ大○思異物而云く有は
刀此中にて大あるを云ふ依べし
じ死物の尾よか依劍の有しうは異物と思しむむ
案然と刃也鍊小て作まる劍の蛇の抑抑あを大蛇の尾
小含み持と依事此異死を思ふよ彼袁呂智也高麗神此
末あるはき事既小云が如く依を總て鐵は人も知お
ぞく蛇の身よ毒と爲すと類れき物依ぐまと蛇は鐵
よ害の依事も類なく彼を切ある刀は荒れはてて再用
ふ依小耐交其趣を思ふよ鐵の性を悉蛇の體小混入る

故に彼が身を害ひ刀は其性を失ひて腐れあま依と見
えぬ也信友説よ西戎の漢高祖と云る王が白蛇を切と
ゆと云劍を始交皇國よも蛇切丸おと云て蛇を
切とる大刀をやおとあ死物に依れ然ばあり鍊を
害ふ蛇をさ刃切とる刀れるよ害され交と云義よて珍
重みけるあらむ然依小彼遠呂智の然ばう也靈異れる
神劍を尾小含交て持ぬ依也案よ小縁此物よを非交ま
ぬ彼劍の神異ある事も然ばか也大蛇大蛇の身内小含
まれ少うも害はれ交て神異を著し天羽く斬之劍此刃
をさ刃小缺と依也最も忌くしれど云まくも更あ也此
大
刀を遠呂智の尾よを如何して含持とめとちて此大刀
云ふと考あり第七十九段よ注ふを見べし
字得給ふと忽小天照大御神小奉也給刃也とある傳ど

も。凡て誤ち也。久しく御許に齋持給へる也。孫子天葺根神を遣して。上奉給するもて知れし。委くは第七十九云。るを。○天蓼雪劍是也云く。蓼を牟羅と訓べし。村雲氣見と。○天蓼雪劍是也云く。蓼を牟羅と訓べし。村雲氣はるぐ久毛と訓べし。靈き太刀を合持ぬ也。し祥ふ也。て。居所の上。異し。死雲の常。小立らむ也。冥然も有はき事。あ也。かし。師云。此太刀此事。始。小伊邪那岐大神の迦具土神を斬給ひし。御刀は著る血の成まる極速日神。斐伊郷。小住給ひて。其斐伊川上。おして。今かく大蛇を斬給ひて。其川。血。よ變て流ると云ひ。其尾中。と也。は。と此靈劍を得給ふは。あ。と。此彼。深。死。由。縁。ある。の。也。神。儲。ま。ぬ。彼。極。速。日。神。と。同。く。成。坐。る。

建御雷神の御太刀。石。上。よ鎮。坐。せ。む。此。の。須。佐。之。男。命。此。御。太。刀。此。同。く。石。上。よ。坐。し。も。ま。と。由。縁。有。ら。り。○斷。は。多。知。と。訓。べ。し。舊。く。伎。理。と。訓。と。る。あ。ま。劍。を。多。知。と。い。ふ。語。の。本。あ。也。○大蛇之。麿。玉。と。は。荒。魂。の。義。あ。也。其。を。此。劍。も。て。遠。呂。智。を。斬。給。ふ。は。須。佐。之。男。命。此。荒。御。魂。の。功。徳。あ。ま。む。れ。也。○天。羽。と。斬。之。劍。○天。蠅。斫。之。劍。と。此。二。劍。此。名。義。い。ま。ど。考。得。矣。○大蛇。韓。鋤。之。劍。を。纂。疏。云。韓。鋤。猶。言。犁。也。劍。形。類。犁。故。曰。也。也。今。本。小。カ。ラ。サ。ヒ。と。訓。と。れ。と。古。本。此。訓。小。カ。ラ。ス。キ。と。也。和。名。抄。農。耕。具。小。廣。韻。云。犁。墾。田。器。也。和。名。加。ま。と。釋。名。云。鋤。去。穢。助。苗。也。和。名。須。岐。也。も。あ。り。○在。石。上。也。古。語。拾。遺。に。も。あ。り。大。和。國。の。地。名。也。和。名。抄。に。大。和。國。山。辺。郡。師。云。在。石。上。伊。曾。乃。加。美。と。あ。り。

石、上を。書紀、一書ふ。在吉備神部許とも有、くら。備前、圀赤坂、郡石、上布都之魂、神社是ありと云、予、已。案、一、通りた。誰も然思、えりれど。熟思、予、む然、非、其、故、を、けし、も、名高き倭、あ、依、を、お、死、て。吉備、あ、依、を、直、し、石、上、とは、云、て、むや。若、吉備、の、ぬ、ら、ば、か、あ、ら、び、吉備、石、上、あ、ぞ、む、あ、ぞ、云、は、け、ま、然、ま、む、あ、不、倭、此、石、上、あ、る、は、し。は、ち、て、推、度、い、ち、も、崇矢田部、遠、祖、武、諸、隅、を、御、使、と、し、て、出、雲、大、神、宮、子、藏、れ、る神、宝、を、召、上、て、見、と、ま、ふ、事、あ、り、矢、田、部、造、を、姓、氏、録、お、とる、よ、物、部、氏、の、別、あ、り、さ、て、垂、仁、天、皇、紀、二、十、六、年、よ、物、部、十、千、根、大、連、よ、詔、し、て、出、雲、の、神、宝、を、檢、校、せ、し、終、仍、て、神、宝、を、掌、ら、し、む、ま、と、八、十、七、年、此、文、お、同、人、石、上、の、神、宝、を、掌、る、こ、と、見、也、然、れ、む、此、須、佐、之、男、命、の、御、劔、出、雲、神、宮、子、藏、ま、り、し、を、右、の、崇、神、天、皇、垂、仁、天、皇、此、御、時、あ、り、と、餘、の、神、宝、と、共、お、京、よ、召、上、と、ま、ひ、て、其、時、と、已、や、石、上、よ、む、納、ら

れ、より、む、此、石、上、よ、ハ、あ、布、種、く、の、神、宝、を、納、ら、れ、し、おと、垂、仁、天、皇、紀、お、見、え、と、已、ち、て、後、よ、所、以、何、已、て、備、前、圀、予、迂、奉、し、あ、る、は、し、其、時、倭、の、本、宮、此、名、を、取、て、彼、を、も、石、上、布、都、御、魂、神、社、と、を、申、あ、ら、む、い、う、ふ、ま、ま、石、上、布、都、魂、と、云、名、を、必、倭、の、と、已、出、と、る、こ、と、明、き、字、や、か、ま、書紀、ま、と、拾、遺、よ、在、石、上、と、云、は、初、倭、よ、坐、し、時、の、傳、予、在、吉備、と、云、る、を、迂、已、給、ひ、て、後、此、傳、説、あ、る、べ、し、然、る、よ、備、前、の、石、上、社、傳、説、ふ、を、神、劔、を、昔、大、倭、の、石、上、予、迂、し、奉、て、此、社、よ、を、坐、ま、さ、む、と、云、へ、り、い、か、く、有、ら、む、ま、と、此、劔、在、吉備、と、あ、依、お、り、ま、さ、む、て、須、佐、之、男、命、の、蛇、を、斬、給、ひ、し、も、案、を、備、前、圀、あ、り、故、よ、籾、川、と、い、ふ、も、備、前、よ、何、已、出、雲、此、斐、川、よ、非、と、い、ふ、説、も、何、ま、ど、信、ら、れ、ま、

故是以其速須佐出男命宮可

造出地求給出雲圀而到坐須

賀ガノトコロニテノリタマハクアレキニシコ、ニテアガミ地而詔出。吾來此地而。我御
心須賀須賀斯也。詔而於其地
作宮而坐矣。故其地者。於今云
須賀也。茲大神初作須賀宮出
時。自其地雲立騰矣。爾歌曰。夜

久毛多都。伊豆毛夜幣賀伎都。
麻碁微爾。夜幣賀伎都久流。曾
能夜幣賀伎袁。亦造御室而所
宿出處。云御室山。爾喚其足名
推手名推神而。勅汝等任我兒

宮出首而於二柱神賜稻田宮

主神云號矣又レノカミトイフナラキ亦云稻田宮主須賀ガ出ノ八耳神亦云

稻田宮主篁イナダノミヤヌシス故以其櫛名田比カレモテソノクシナダヒ

賣メラ亦云稻田メラ云ニイナダ於久美度起而令ニクミドオコシテシメ

產出神名八島士奴美神其奇ウマタマヘルカミノミナハヤシマジヌミノカミソノクシ

稻田美等與麻奴良比賣命將イナダミトアタハスマヌラヒメノミコトムトシ

產出時求將產出處而來坐熊ミコウマタフトキニマギムウミサトコロヲテキキマシクマ

谷鄉而甚久麻久麻志枳谷在タニノサトニテイトクマダグマシキタニナリト

詔出故其地云熊谷也ノリタマヒキカレソコライフクマタニト

是以とは奇稻田比賣を得給へる事を承て云コラモテ宮造の事カケ係と云ミヤベキツネトコロ宮可造之地師云宮を御宅ミヤあり宮字を造字の下字の下

見る意ふ けりて此宮造^リて全奇稻田比賣^ノ御合坐^ル料^ヲ
 見^ルば。書紀^ノ。然後行^キ將婚^ス之處^ト何^レ依^ル。即^チ此^ノ文^ヲ當^ル哉。
 もて知^ラば。凡^ソて上^ツ代^ヲ。婚禮^ハ行^ハる^ル。先^ニ其^ノ屋^ヲを造^リし
 事^ハ也。彼^レ伊^ノ那^ノ岐^ノ伊^ノ那^ノ美^ノ大^ノ神^ノの御時^ヲも。○須^ガ賀^ノ地^ヲ
^{先^ニ八^ノ尋^ノ殿^ヲを見立^テ給^フしこと思^ヒ合^ハれべし。}
 御紀^ノ。遂^ニ到^リ出^雲之^清地^ト有^テ。清^ク此^ニ云^フ素^ガ鵝^トと注^セ也。
 ○我^ガ御^ニ心^ヲ須^ガ賀^ノ須^ガ賀^ノ師^ニ云^フ書^紀。吾^ノ心^ヲ清^ク淨^ク之^ヲ何^レゆ^ニ此^ノ
 言^ハ此^ノ意^ハは。濯^クス^レ伎^ヲ也^也。去^クを^ハけ^テ。グ^シキ^ト云^フも。さ
 ぞか^シき^ト云^フも。同^ノ格^ノの語^ヲ。於^テは。己^ガし^キ也^也。も^シぐ^クを^モ
 須^ガ賀^ノ須^ガ賀^ノと云^フも。多^シし。そ^ノま^ハ滞^ル也^也。○源^ノ氏^ノ物^ノ語^ハ也^也。
 必^ズ此^ニ也^也。本^ニ也^也。別^ノ意^ヲ。ま^ハ垢^ノを^ハ清^クき^ト。滞^ル也^也。
 須^ガ賀^ノ須^ガ賀^ノと云^フも。言^ハの^ノ。今^ニ此^ノ地^ヲ來^テ坐^ルば。御^ノ心^ヲち^ハ洗^フ濯^ス
 也^也。委^ク云^フて^ハ也^也。

ある如^ク。潔^ク所^ヲ思^フ給^フ也^也。今^ニ世^ノの言^ハふ。心^ノの清^クと云^フ
 同^シ。出^雲風^土記^ヲ。安^ノ來^ノ鄉^ノ神^ノ須^ガ賀^ノ乃^ハ鳥^ノ命^ノ天^ノ避^ル立^テ廻^リ坐^ル來^ル
 坐^ル此^ノ處^ニ而^テ吾^ノ御^ノ心^ヲ者^ハ安^ノ平^ノ成^ノ詔^ト故^ニ云^フ安^ノ來^ノ也^也。と^ハる^ルを^ハ合^セ
 見^ル也^也。今^ニ云^フ。此^ノ事^ハ。既^ニ第^ニ六^ノ段^ニ也^也。處^ヲ異^ニあ^ラま^スも。事^ハ此^ノさ^ラる^ル全^ク
 同^シきを^ハ以^テ。古^ノ傳^ハ此^ノ意^ヲを^ハ準^テへ^テ知^ラば。安^ノ平^ノ成^ノも。心^ノの落^チ
 著^ク意^ヲを^ハ云^フも。心^ノの清^クと云^フも。同^シ也^也。然^レも。此^ノ時^ノの自^ラ所^ヲ思^フ御^ノ
 心^ノちを^ハ云^フも。俗^ノよ^クい^ハふ^ル心^ノ持^テ也^也。全^ク此^ノ時^ノの自^ラ所^ヲ思^フ御^ノ
 の^ハけ^レだ^ラ。非^ズ然^ルを^ハ穢^ク惡^ク心^ノ性^ハ也^也。清^ク淨^ク善^ク心^ノも^ハ變^化
 給^フ意^ヲと^ハる^ル精^ヲを^ハ説^ク也^也。凡^ソ多^ク漢^ノ意^ヲも^ハ佛^ノの^ハ心^ノ法^ヲ
 学^者此^ノ僻^ヲを^ハあ^ラへ^テ。も^ハれ^ル也^也。万^ノの^ハ事^ヲを^ハ儒^ノ佛^ノの^ハ心^ノ法^ヲ
 説^ク也^也。と^ハる^ル云^フも。此^ノの^ハ御^ノ言^ハあ^ラど^ク也^也。今^ニ大^ノ蛇^ヲを^ハ斬^ル
 て^ハ無^ク上^ノ靈^ノ劍^ヲを^ハ得^テ給^フ也^也。此^ノ功^ハ比^シ類^ナあ^ラま^ス也^也。因^テ。自^ラ御^ノ心^ヲ

ち清くよく成て所思免ひあるべし。蛇を殺して民の害を除去給ふを以て
功とけるを當らば其の功も非ざるを。ちて來此
上りやうてを。何むか。此の功も非ざるを。ちて來此
地を。其地も係て云。此の地もまゝと。深き所以あはれし。
其の凡心うは測のあし。抑、此地を奇稻田比賣子御婚
る功績を立給ふ。始免此地を。御子孫天下大
て。御心は。よく所思む。宜うざりける。○作
宮而坐矣。師云。おれ坐字を。上此到坐。此坐とは異ふして。
住居多ふと云意おれ。麻く志く氣流を訓はし。上の
を住居あり。下の麻志は崇辭あり。さて下は。麻流と云こ
を添ふるを。語れ勢おとまり。其の邪母を訓はし。那
流としも云こと。は。其の地。字。曾。許。爾。那。母。を。訓。は。し。那。母
の結辭。凡て。文章。を。如。此。上下。相。應。ふ。辭。の。格。を。知。ま。る。
と。お。依。を。後。世。人。に。文。ハ。こ。お。乱。て。辭。の。く。さ。を。知。ま。る。
人。委。べ。て。あ。し。近。き。こ。ろ。文。章。も。不。こ。る。人。何。ま。ど。猶。こ。れ

を知ら。○於今云須賀也。師云此地を。出雲風土記を細小考
らば。は。お。大。原。郡。須。我。山。郡。家。東。北。一。十。九。里。一。百。八。十。步。
須我小川源出須我山と見えて。同郡も須我社も見や。ま
多意宇郡野代川源出郡家正南一十八里須我山とある。
此須我山も。即右の大原郡あるを云ふ。須我山を大原
ありて。其。ちて。同郡熊野山郡家正南一十八里。所謂熊野
大神之社坐と見や。かくまむ須我山熊野山を。相並はる
處おまむ。共は郡家正南十八里とあれむあり。熊野神宮ぞ。即此須賀宮處
れるべき。故思ふよ。久麻野を隱野の義ふして。今云久麻
を通ふこと。第三段。御歌詞此都麻基微の由。おはれし。
よ注せは。ぐ。お。と。し。

或説ハ須賀宮地ニ出雲郡出雲郷ニして式ノ出雲神社
とハ有ル是レありと云フ予リ伊豆毛夜幣賀伎ト云フ御詞ハと
れハ信ト此レ説モ由キ非ズ然レまドも風土記ニ現レ此
山川社ハ此ノ名ニ須賀と見えマ熊野御社ハ彼レ此
を思フ猶上考ス依ルべしハ杵築大社ハ後ニ作リ事
今ハ其レ趾ト云フ八雲山ハ云フ何レ後ニ世ニ作リ事
あチて此ノ神宮ハ式ノ意ニ宇郡熊野坐神社ト名ニ神トをハ何レ依ル是
れハ也ト今ハ云フあチ此ノ御社ノ事ニ第ニ○茲ハ大神師云あチふ始
て大神ト申セ也ト下皆同じニ伊邪那岐命モ夜見圍段ノ
をハ依ルちテ此レ熊野宮ハ坐マる處ヲ指テ申セるハ也ト
若シ然ラびニ更テ茲ニ於テ今ハ須賀ト云テ其レ須賀宮ハ坐
大神ト云フべきハ非ズ於テ今ハ須賀ト云テ其レ須賀宮ハ坐
委テ茲ニ大神ノ意ニ於テのハ顯レあチ也ト須賀ト熊野ヤ本
みニ其ノ須賀テふ名ニ近キこノりノ山川ハ此レ也ト熊
野テふ名ニ神宮ハ此レこノりテ遂ニ別レあルが如クあマる

○初作ル師云都久理波自米給ト訓テも有ル也トはレれ
ぞハ茲ニ大神トはレ此ノ宮ハ坐マるハ後ト云テ是レ立チ返リ
てハ其レ初メを云あマむハ初メ字ヲ別レ波自米ト訓シ○雲立
騰ハ矣ト師云是レはレ此ノ地ニ宮造シ婚坐シて吉クるハべきハ瑞キ也ト
あチ何レの雲トも無レ也ト尋常ハ雲ハ何レとハ外
立チしテも有ルむハ也ト古今集序小注ハ八色ノ雲ハ立チ
てハ云フへハ○歌曰ク宇多比多麻波久ト訓シ宇多トい
ふ語ノ由ハ既ニ云フ牙ハ也ト第六段ノ傳見ベしハ○夜久毛多都ハ荒
木田久老云彌組立也古事記ハ倭建命ノ御歌ハ夜
都米佐須伊豆毛多祁流ト見えマ万葉三卷ハ人麻呂歌ハ

は。ハ雲刺出雲子等と何まば。夜都米も夜久毛も同言ぞ
と云子ぞ。雲と云體言を。都米と云ては。雲ぞとは誰う心
得む。まゝと續紀よ。ハ裳刺曲せあるをも併せて考ふるよ。あ
れ久毛は組の用言ふて。涙ぐむ角ぐむ芽ぐむれどの久
牟ふ同じく。聚る催は意と聞ゆまむ。雲といふ名もそれ
る名。彌組立は意はと其を都米とも云は。詰ふて。今此
言よも。雲の扱むと云。是あり。ハ裳せ何れも彌詰あり。然
れむあぐ。出雲ふか。は發語とれみ見るばし。けて刺と
立せは同意れ言よたて。今言ふも。さし曇とも立曇せも
云子也。後撰集歌ふ。いよし子れ野中の清水見るからふ。

刺くむ物を涙ありなり也。や有もて。おれ刺と云言を按ふ
ばし。今云記傳よ。夜久毛多都を。彌雲起よて。彼雲の立騰
幾重も立疊おは意ぞ。と言ま扱る。○伊豆毛夜幣賀伎師
とり精なりれ。久老説ふ依るあり。云伊豆毛は出雲子て。伊傳久毛の傳久を約て豆とれま
はあり。此を因名ふて非也。夜幣賀伎を彌重垣ふて。
幾重も何れを云ふ。但し此を。案此垣を云ふは非也。ハ重
雲の立出るを。垣と云成給子るれ也。雲霧を彼方此方
を隔ちあや垣ふ似と也。上の夜久毛の夜を承て。此夜
云。あお此。契冲法師加茂翁あどの説を論ハれとるを
其を洩し扱。さて久老云。武烈天皇紀。了も。たなきみれ。ハ
重のくみ垣とありて。垣ふも組といひ。雲も組む物あり
む。か。と。由有て聞ゆ。くみ垣を。こも也。垣あるべし。

けりて此御歌詞と起^{オコ}せ^テ。因名を出雲と負^{オヘ}せ^テ。さる^ウら
云言も其枕詞とあれるあり。○今云此御詞ふと^リ。○都
て因名と為まる事、第七十六段の末に見えと^リ。○都
麻基微爾^{マキミ}を。夫妻^{ツフ}隠^カふ^テ。夫婦^{ツフ}隠^カる^料ふと云意あり。凡
て都麻とは。夫^ツ子^コ對^カへて妻を云^レ此^レみ^らら^ズ。妻^メ子^コ對^カへ^テ
夫をも云稱^リて。夫婦の間^マを互^ニ云^フ子^コだ。俗^ニ都^ノ阿^ノ比^ノ
此^レを夫婦^ヲをか^レ糸^ヲて云^フ也^ナ。さて微^ミ字^シ書^キ紀^ルに^テ味^ミと^アり
む。基^キ微^ミを基^キ母^モ理^リの約^{ヨク}め。基^キ味^ミを基^キ母^モ良^リ世^セの約^{ヨク}也^ナ。此
句^クを妻^メと共^ニと云意^ニ見^テ。稻^イ田^タ比^ヒ賣^ウや諸^{シヨ}け^テ夫^ツ婦^メ隠^カ
共^ニ宮^{ミヤ}造^リ給^フを云^フ也^ナ。云^フ説^トを^ウあ^ハす^ル。け^テ夫^ツ婦^メ隠^カ
依^レと云^フ例^レ也^ナ。上^ノ久^ク美^ミ度^ドの解^{トク}ふ^ルの如^シ。今^ノ云^フ此^ノ師^シ説^ト
子^コ注^シせる。○夜^ヤ幣^ヘ賀^ガ伎^キ都^ツ久^ク流^ル也^ナ。師^シ云^フ彌^ヤ重^ヘ垣^{ケン}造^ル也^ナ。此^レも
字^ジ見^ル。

案^{コト}此^レ垣^{ケン}を云^フ非^ヒ也^ナ。彼^カ雲^{クモ}の垣^{ケン}を成^スと云^フ也^ナ。久^ク老^ロ云^フ
加^カお免^メる義^ギあ^ハま^ス也^ナ。雲^{クモ}字^ジ垣^{ケン}と^ス也^ナ。雲^{クモ}の立^タ出^デるを造^ル
依^レと宣^シひし如^シ也^ナ。今^ノも船^{フネ}人^{ヒト}の言^ハふ西^セに雲^{クモ}此^レ作^ス也^ナ。
を風^{カゼ}吹^フぬ^ル也^ナ。し^テあ^ハり^テ造^ルと。○曾^{ソウ}能^ネ夜^ヤ幣^ヘ賀^ガ伎^キ袁^{エン}師^シ云^フ
曾^{ソウ}能^ネは其^レあ^ハり^テ都^ツ麻^マ基^キ微^ミ爾^ニの句^クを承^ケて云^フ也^ナ。儲^{サテ}加^カく二^ニ度^ド
上^ノ詞^ジを返^シして云^フ也^ナ。古^コ歌^カ此^レ常^{トク}あり^テ中^{ナカ}頃^{キョウ}と^ス也^ナ。此^レ格^{カク}あ^ハり^テ
を返^シて今^ノ世^セの俗^{ソク}に謠^{ワカ}歌^カよ^ク常^{トク}多^クし。是^レ歌^カ謠^{ワカ}の自^{オノ}然^ニ也^ナ。勢^セ
ふも折^セ返^シせ^テ也^ナ。其^レ情^{コト}深^シく^テ依^レ事^{コト}ぞ加^フし。終^{トク}に袁^{エン}は只^シ助^{ツク}辭^ジ
よ^ク也^ナ。余^ヨと云^フむ^ク如^シ也^ナ。此^レ格^{カク}多^クし。下^ノ云^フべ^シ袁^{エン}作^スると上^ノ
何^{ナニ}ら^ニけ^テ一^{ヒト}首^{ウタ}此^レ意^イを扱^ヒら^ズ糸^ヲて云^フ也^ナ。今^ノ吾^ガ須^ス賀^カ宮^{ミヤ}を造^ル
時^{トキ}しも八^{ヤチ}重^ヘ雲^{クモ}の起^キ也^ナ。此^レ立^タ出^デる雲^{クモ}八^{ヤチ}重^ヘ垣^{ケン}を成^ス也^ナ。吾^ガ夫^ツ

妻隱らむ此宮此料小。雲も八重垣を作るあやと。と歌ひ
給子依れ。凡て雲のうす此宮の垣を造るといふ意字う
糸て看むひぐとぞとく。此餘此義何依あやれし。
詞字味ひ知らむ。明あらむ。後世子神道此輩御哥くさく言痛き説を
於け或を祕事おとあやと。あく云何あまど凡て古
字あら然説れまむ論ふも足らぬまど稲田姫の答
哥とて有も古躰まむら後世の作事そはと此御哥よ
あ布袁呂智の事をいひて八重垣造るを警戒。○亦造御
の意ぞれといふも。ちらよ由あきことれり。
室而云く。風土記ふ。大原郡御室山郡家東北一十九里一
百八十歩。云くと見也。あ云くと約と依と。即。室は和名
抄子。無呂と何。半呂を寝屋ふ依詞と思は。ちて此御
室は須賀宮の事ふて。彼宮を造らあ。時ふ宿正給子依

傳あ依べし。内山眞龍が解も然云ひ。師も須我山も此
とありて。相近き処あまむ須賀宮此あ。此山を。風土記抄
をを如此傳子とる。うと言れと。此山を。風土記抄
ふ。在海渚郷飛石村山名を何。○爾喚云く。師云あ此喚
を米志氏と訓て。下れ任字をば。多禮と訓。其由を次
子云。○首を。師云都加佐と訓るも。誤ふを非祢ぞ。あ不意
毘登と訓。大人の意あ。今云諸氏の加婆泥。首と
説を委く第三十九。ちて此此首は後世の宮。く三后宮此。
長官此如くある。残云れ。○任を多禮を訓。其由は。凡
多理と云。辞ふ二。あり。登阿理と氏阿理と。此約ま。とる
あり。此を。此登阿理の約れる多理を。仰。去る言あ。故
ふ多禮と訓あり。多。ま。此字は。拜某官此拜と。同く。余佐
礼を即登阿礼あり。ま。此字は。拜某官此拜と。同く。余佐

須と麻氣賜と米須也。三の訓ある中。余佐須は此小叶
をび。まと麻氣賜をも訓ばうらび。麻氣ミキ也。京ミヤコと。他タ國クニの
官ミヤに令ミコト罷シ意イて。即ツキま
らせを約ヨクて。麻氣と云あり。万葉マンヤフに此言多し。みあ
ふの官ミヤにありて。行ユクこせ。み云ミ牙キ正マサ心ココロを付ツケて見ミは
は。史シ記キ南ミナミ越エチ傳デン。天子テンシ罷シ也ヤ。とあり。此訓コトおて。一ヒトケは
と。訓コトむをみど。米須メスと訓コトぞ。此コトは叶エハ牙キ依ヨ米須メスを其人コノヒト召メシ
と。訓コトむをみど。米須メスと訓コトぞ。此コトは叶エハ牙キ依ヨ米須メスを其人コノヒト召メシ
來キて。其官ミヤノカミを授タテマツくる意イおて。司ツカサツ召メシ云イハ是コト也ヤ。顯ミツカ宗ミヤノミコ天皇テンノウ紀キ
古コ天皇テンノウ紀キ。任マカ僧ソウ正マサ僧ソウ都ツ武ブ天皇テンノウ紀キ。拜マカ造ソウ高タカ市シ大オホ寺テラ司ツカサツ
おどあり。凡ソトて上ウヘ代トコロに召メシす。本ホ居イる人ヒトを京ミヤコに召メシて。官ミヤノカミに
を任マカ給タテマツ牙キゆし。故ユヘに召メシと云イハし。其コノ名ナ目メを後ノチまで遣ツケれり。
古今コノイマ集ツグミ雜ツグミ部ブの詞コトバ書カキも。もろこしミヤコの判ハカ官ミヤノカミに終ハシまて。云イハく
と。何ナニるを異ヒト國クニに遣ツケは。おまむ。まけられた。と有アべきを。然シカら
と。云イハれて。有アる。違ヒガ牙キる。凡ソトて。米須メスと云イハす。彼カノ時トキ代トコロに。既スデく麻氣ミキ
と。云イハす。名ナ目メハ。絶ツグて。凡ソトて。米須メスと云イハす。彼カノ時トキ代トコロに。既スデく麻氣ミキ
小コ同トウじ。まといは。ゆ。任マカ大臣オホミヤノカミを。後ノチ撰ツグミ集ツグミ榮エ花ハ物モノ語コトバおぞ。此コト

大臣オホミヤノカミ召メシと有アる。古コノ意イよ。か。ま。ば。同トウ任マカ字ジも。其官ミヤノカミ小コと
く。叶エハ牙キる。名ナ目メあり。か。か。ま。ば。同トウ任マカ字ジも。其官ミヤノカミ小コと
て。皇ミコ國クニの言コトバは。異ヒトを依ヨぞ。の。儲タケ此コト也ヤ。上ウヘに喚イダシと。何ナニ依ヨの。
此意コトバ小コ當タテマツる。故ユヘに。此任マカ字ジは。多オホク禮レと。訓コトば。き。お。也ヤ。○賜タマフ云イハく
云イハ號ナヅケ矣ヤ。須ス佐サ之ノ男ヲ。大神オホミヤノカミの。此名コノナを賜タマフふ。凡ソトて。○稻イナ田タ宮ミヤ主ヌシ神カミ。
師シ云イハ稻イナ田タ也ヤ。須ス賀カ地チ比ヒ舊コノ名ナあり。故ユヘに。稻イナ田タ宮ミヤと。も。云イハル
む。内ウチ山ヤマ氏シ云イハ。稻イナ田タ也ヤ。今イマ仁ニ多タ郡クニ横ヨコ
田タ郷サトの。里サト名ナと。おれり。と云イハす。か。ま。む。稻イナ田タ比ヒ賣ウレ云イハす
は。此コト小コ宮ミヤ造ソウ也ヤ。御婚ミコトウケ坐イマる。と。云イハす。此名コノナを依ヨぎ。を。父チチの。初ハジメ
了マタ名ナ告ツケれ。依ヨは。後ノチ名ナを廻マワして。語コトバ傳ツグミへ。ある。お。也ヤ。主ヌシを首オビと
同意トウイお。也ヤ。須ス賀カ也ヤ。此コト了マタて。を。既スデに。小コ地チ名ナれ。也ヤ。其故コノユヘは。さ。死シ小
吾ガ御心ミココロ須スく。賀カく。斯シと。詔ミコトノコトバ牙キる。此コトみ。よ。て。也ヤ。此コト神カミ名ナを。負オシせ

給ふはでを有はじれむあ也。八耳を。借嚴都美い。伊
加都と云名の例。あまかま有れむ也。伊切。夜は足
撫耳を約。と依名あらむ。阿志那を切。耳は尊稱ある
おと。上ふ委く云依が如し。今云此師説。第三十三若足
撫耳の意。れらむ。足名推也。云と同じ。貴の須佐之男命。比
婦よ。給ひて。稱。子し。名。あらむ。や。上。よ。云。を。思。ひ。合。は
ば。此。然。る。字。八。耳。の。文。字。は。就。て。口。訣。了。聞。八。方。稱。と。云。る
申。せ。る。例。を。引。も。縁。あ。き。漫。言。あ。り。ま。と。聖。徳。大。子。を。八。耳。と。申。せ。し。こ。や。古
事。記。よ。も。書。紀。よ。も。當。ら。び。彼。太。子。を。八。耳。と。申。せ。し。こ。や。古
名。あり。と。も。書。紀。よ。も。當。ら。び。彼。太。子。を。八。耳。と。申。せ。し。こ。や。古
何。る。事。引。も。心。得。ま。と。大。祓。詞。一。本。小。棹。鹿。乃。八。乃。耳。云。く
と。云。を。引。も。心。得。ま。と。大。祓。詞。一。本。小。棹。鹿。乃。八。乃。耳。云。く
依。り。子。は。乃。鹿。も。神。も。耳。と。云。ば。き。由。何。ら。め。や。簀。狹。ハ。須。佐。て。ふ。地
ら。補。む。八。乃。耳。と。云。ば。き。由。何。ら。め。や。簀。狹。ハ。須。佐。て。ふ。地

名。飯石郡小も有れど。此を其ふ。何ら。須く。賀を。切。て。須
佐と云る。れむ。也。即須賀也。同じ。上。了。須。賀。須。賀。斯。を。須。く
を。思。ひ。合。せ。む。○今云。杵築大社。記。よ。八。重。垣。神。主。佐。草。氏
を。足。名。推。神。の。後。あ。り。○又云。佐。久。佐。社。八。重。垣。明。神。也。能
義。郡。佐。久。佐。郷。に。坐。り。本。社。に。稻。田。姫。素。盞。鳥。命。大。己。貴。命
を。合。せ。祭。る。左。右。に。社。ハ。手。摩。乳。脚。摩。乳。を。祭。る。當。社。の。神
主。佐。草。氏。媒。氏。と。も。書。○於。久。美。度。起。而。上。ふ。出。と。也。考
巴。稻。田。宮。主。後。也。や。ぞ。○今。産。之。は。宇。麻。斯。米。給。閉。流。と。訓。は
合。云。は。傳。第六。段。の。○今。産。之。は。宇。麻。斯。米。給。閉。流。と。訓。は
此。を。本。所。生。と。有。れ。む。出。雲。風。土。記。よ。娶。奴。奈。宜。波。比
賣。命。而。令。産。神。云。く。と。有。を。始。余。の。古。書。よ。も。例。多。り
も。常。お。ま。ど。令。産。と。云。り。と。理。正。く。通。め。れ。む。也。○八。嶋
士。奴。美。神。名。意。は。師。云。士。は。知。奴。を。主。美。は。稱。名。耳。比。略。ふ
て。上。ふ。云。子。る。例。の。如。し。今。云。此。師。説。を。第。三。十。四。段。の。傳

はて此御名を。後小大國主神。國造して天下をうきはき
坐依時よ。遠祖ふ依故よ。如此稱予しよや。若然らばを八
嶋知主とは云ははくこそ。○奇稻田美等與麻奴良比賣
命此のみをクレイナダと訓こやハ名意奇稻田を上小
注予也。美等與内山眞龍説よ。如此訓て。古事記よ。八上
比賣者。如先期美刀阿多波志都雄畧天皇紀よ。與一夜而
娠ふと有を引ふ依よ依ま也。此を前ふ美等与と訓て
久志伊奈太美等与麻奴良比賣と書て。悉く假字ふまを
與字のみ訓を用ふはくも非安を思へ也。是れろり
き故改。麻奴良は眞寐ふて。眞處與はし眞小寐る。といふ
意の名ふ依はし。眞龍を足名推神此須佐之男命よ吾名
は云く。妻名を云く。女名を奇稻田比賣

と告とれむ。眞告あり。奴と乃と通ふと云へれど。い
あらむ。まよ万葉十六よはしとの熊來酒屋よ眞奴良
畧奴和之。まよひ立云くとある。眞奴良畧も同言あらむ
の畧解よ。まよ發語ぬら依を所罵ありと注り。考ふべし。
○將産之時は。美古宇麻牟登斯給布時爾を訓み。將産之
處を。宇美麻佐牟處と訓はし。○熊谷郷を。出雲風土記よ。
飯石郡熊谷郷。郡家東北二十六里云くと見也。和名抄を
よ。飯石郡熊石と誤まり。内山氏解よ。熊谷は。斐伊川の西岸。上下は熊
谷を合せて。一郷と云云也。○久麻久麻志。枳谷在は。隱
かふて。御子生給ふよ。甚宜き處と求得給へ依事を。歡び
坐る御言れ也。在字を那理を訓むを常也。儲神名式よ。
山城國相樂郡よ。綺原坐健伊那太比賣神社と云也。此社

此と、考證よ。王手の南平尾村の北に、田村あり。今蟹
満寺の南に、森中、お在て、俗に梶原社と云、お和名
抄よ。相衆郡蟹幡加無波多とあり。此を、お蛇を殺せ
依を元亨釈書よ。靈異記あり。蟹命を助けて、蛇を
を附會せ。蟹幡字、お就て、安、お蟹満寺、此縁起を作
ゑ能登、お能登郡よ。久志伊奈太伎比咩神社と云、お依
此、お賣命を祀き、依社お依
法し。然れど、其祀れる由
縁を、今知べうらば。

茲速須佐出男大神出御子都

雷支日子命。此神出。此處耶。吾

敷坐山口處也。詔出地於今云

山口亦子囷忍別命。此神出。吾

敷坐地者。囷形宜也。詔出處云

方結亦子磐坂日子命。此神出

囷巡坐出時到坐惠曇鄉而。此

處者^コ因^ハ雅^{クニ}美^{イシク}好^{ウルハシク}。因^{クニ}形^{ニガタ}如^{ナセル}畫^{トモ}鞞^{カモ}哉。
吾宮者^{アガミヤハ}將^{ムト}造^{ツクラ}此處^コ云^{ニノリタマヒキカレ}矣。故^{イフ}云^エ惠
曇^{トモトマタノミコ}亦^{ツキ}子^{ホコト}衝^ヲ杵^ル等^ヒ乎^{コノ}雷^{ミコト}比^{コト}古^{コト}命^{コノ}。此
神^{カミ}出^{クニ}因^{メグリ}巡^{マシ}坐^シ出^{トキ}時^{ニイタリ}。到^タ坐^{ダノ}多^{サト}太^ニ鄉^ニ
而^テ吾^{アガ}御^ミ心^{ココロ}者^ハ明^{アカク}正^{タミシク}真^{ナリ}成^ヌ焉^{アハムト}。吾^{アガ}將^{ムト}

靜^{シヅ}坐^{マリ}此處^{マサコ}云^コ而^{ニノリ}靜^{タマヒテ}坐^{シヅマリ}矣^{ニシキ}。故^{カレ}云^{イフ}多^タ
太^{ダト}亦^{マタ}子^ノ青^{ミコ}幡^{アラハタ}佐^サ草^{クサ}日^ヒ古^{コノ}命^{ミコト}。此^{コノ}神^{カミ}
於^ニ高^{タカ}麻^サ山^{ヤマ}上^ノ。蒔^{マキノ}初^メ麻^{タマヒ}矣^{アサラキ}。故^{カレ}云^{イフ}高^{タカ}
麻^サ山^{ヤマ}於^ニ此^{コノ}山^{ヤマ}上^ノ其^{ソノ}御^ミ魂^{タマ}坐^{マセ}也^リ。又^{マタ}
此^{コノ}神^{カミ}出^{マシ}坐^{マシ}處^{トコロ}云^{イフ}大^{オホ}草^{グサ}也^ト。

此段と次段とは全く出雲風土記の傳を採集して記せ
也。○都留支日子命名意劔子由あはべしとを思子ど其
由いまど見當らば。内山眞龍を須佐之男命天よて誓坐
牙とるくと云れど然を思われぬ八束水臣津野命天葺
根神と申ひ二柱の名ハ正に藪雲劔子由ありて負坐る
名あるを思ふ此神も彼劔子由ありて負坐る
由ありて此名を負給牙る。○敷坐とを地をうしは
死坐を云祝詞ふ敷坐固敷坐嶋おぞは是也。○山口
を。山北上余リクテ口をいふ語也。風土記ふ嶋根郡山口郷郡
家正南四里二百九十八歩とあり。同記抄ふ山口郷東川
村也と。はと此條ふ布自積美高山郡家正南七里二百一
十歩高二百七十丈周一十里とあは山北口を云と内山

眞龍を云牙也。同記抄ふ此山跨山口朝酌まよ此條ふ布
自伎彌社といふあり。自伎美神社也載さまと也。右嵩
此頂ふ在やぞ。都留支日子命を祭れるふを非ざあり。風
記抄ふ合祭布自積美多氣二社。○固忍別命名意忍は大
於山頂今俗云嵩大神とあり。○固忍別命名意忍は大
別を師説の如く吾君兄の約れありて建き義の名あり。
此は既ふ隱岐固此亦名忍許呂別の處了注へ也。まよ別
同言あらむの考を淡路穂之狹別此
処に注へり共ふ第八段の傳見るべし。神武天皇卷ふ石
押別と云人名もあり。○宜を延斯と訓はし。宜を延と云
は古語の常あり。○方結は宜を詔牙る延てふ語を訛也
て。由比や云牙依故ふ。舊く結字を書りむ。然らでた此字
を書べき由あり。

し本よ方結今依前用と云ひ。然るも今は返りて。加多延
和名抄ふも方結や書と云。其下より引く鈔よ方結片
を呼ふとぞ。江浦也と有もて知べし。はて風土記了。嶋
根郡方結郷郡家正東二十里八十歩と見え。其鈔よ片江
浦也。加僧都玉江七類浦爲一郷也。同郡よ方結社と
云も風土記ふ見也。方結社を鈔了。片江浦伊比都加。○磐
坂日子命名義字の如くおゆる。坂を借字して榮の義。
思ひ定がゑし。若くは天津磐境ふ由ある。其の第百三
十五段此傳了注べし。まゝ履中天皇の御
子よ磐坂皇子と申は有て。此を大和国地名よ依る
御名と通やまぜも。此神名ハ其地名よ依れりとも所思
え。○国巡之時と云。国々を作堅。巡見給ふ由おゆる
也。須佐之男命は天壁立極廻坐とある處ふ既了注了也。

第六十五段 ○惠曇郷也。秋鹿郡也。風土記よ惠曇郷郡
の傳見べし。家東北九里三十歩と見也。同記の鈔よ江角古浦武代本
郷也。蓋意佐田宮村可亦以入
此郷と ○国稚也。久邇伊志久也。訓はし。神代紀一書よ国
あり。クニイシツチイシ 伊志久は宇比志久了。宇比は伊初
を訓るよ依れ也。初志死由ふり。初し死を稚き意をもて。此字を書くと見
也。古事記の初発ある国稚を師をク ○美好を二字ふて。
宇流波志久也。訓べし。○畫鞞鞞を上ふ出で委く注了也。
第三十二段 畫を惠と云は繪字の音也。と師説も有れ
の傳見べし。と舊く云は古語ある也。此御言ふ依て知られぬ也。文
書ことと舊く有り。人形造るよとあざもいと。然まど
古く有し。うむ。画を書くよ。ざもあざり無らむ。

惠てふ言此義未考得交。鍊胤云。こを後古史本辞は
る畫鞞とあるは神世小畫多依鞞の製ありて其不如と
依由亦依依し。江次第あどよ。鞞繪と云ふと有て常よを
繪あり。画鞞は画字書と。○惠曇を風土記に。本字惠伴と
る鞞れ。混ふべららば。○同郷小惠杼毛社と云もあり。
見え。和名抄よを。惠曇と。同郷小惠杼毛社と云もあり。抄
惠曇。郷中朝日山七社中也と見。此等よ依て訓法し。杼毛
也。磐坂日子命を祭る依依べし。此等よ依て訓法し。杼毛
字を書とるを。ドニの音此韻を。○衝杵等乎留比古命。杵
杵の省。用ゑ依あり。と師説あり。○衝杵等乎留比古命。杵
字あり。衝杵を杖杵ふて等乎は。拆竹之登遠く登遠く此
登遠と同じ。撓む義ある法し。留を万葉二卷小奈用竹乃
騰遠依子と連と依余流の余を省れ依語よて。因作也巡

見給ふよ。杖給へ依杵此撓むむ加也。長き由をもて稱予
と依御名あるう。神等の因巡りよ。杵を杖給へるあと。第
依日子命と申は。神はと若くは杖杵の徹ると係と依御
名をも思合也。法し。はと若くは杖杵の徹ると係と依御
名。徹をトホルあまむ。仮字違へ也と疑ふも有べら
むうし。まよ式。陸奥。因磐瀨郡。杵衝神社と云あり。何
ある神よや。○序よ。云む。後。和泉。因風土記よ。大鳥郡。
云。古。老。傳。云。昔。素。佐。鳥。等。御。子。衝。杵。等。乎。而。留。比。古。命。巡。
行。此。因。詔。吾。御。躰。衰。坐。詔。而。靜。坐。故。云。於。止。利。今。謂。大。鳥。者。
訛也。とある。云。出雲。風土記。を。学。び。作。れ。る。漫。説。あり。乎。留
の。間。よ。彼。風。土。記。も。而。字。錯。り。て。入。ま。る。を。右。文。了。其。誤。字
さへ。其。ま。入。り。し。○多太郷。同記よ。秋鹿郡。多太郷。郡
た。いと。嗚。呼。あり。し。○多太郷。同記よ。秋鹿郡。多太郷。郡
家。西北。五里。一百二十步とあり。和名抄よ。秋鹿郡。多太
岡本。大垣。二村也。今岡本。与。○因巡。を。上。よ。云。予。依。如。く。因
秋鹿村之堺也といなり。○因巡。を。上。よ。云。予。依。如。く。因

作、巡見給ふれ也。○明正眞成焉は阿加久多陀斯久成奴
を訓^レはし。本よを照明正眞成と有前小須佐之男命此安
來、郷小渡來坐して吾御心者安平成焉と詔ひ須賀地小
到坐て我御心須く賀く斯と詔^レ予るよ同じ。○靜坐とを
他小知られ安隱めて顯れ給え終を云。委くを第百二十
三段大圀主神の
長隱鎮坐^レに処同郷小多太社といふが二社あ也。此神此
鎮坐る處あるはし。抄云多太兩神を多太郷岡本村。○青
幡佐草日古命。佐草をまよ佐久名意青幡を青島佐草は
麻草此阿を省け依よて島小麻を蒔初給へ依由の御名
を聞也。幡を借字あり依よと佐を眞よ通ふ佐よて佐草と
は麻を稱よる語よも有べし眞竜を青幡を冠辞

あり万葉集よ青幡之忍坂山まよ青幡木幡とも連けよ
依を思ふよ。佐久左の佐を發語よて青幡の如く靡く草
と連々しあり草を多き中よ萱をさよ。○高麻山を多加
や云へり然れど此れ故事よのあはよ。
佐山と訓はし。高小阿の韻有れれ也。高天原あど本小
の例れり。
大原郡高麻山郡家正北一十里二百步。高一百丈周五里。
北方有檉椿等類。東南西三方竝野と見也。抄よ在八代郷
三代村俗曰高
塚山と。○蒔初麻矣云く。此御圀の地小麻を蒔よ依初あ
也。其を高天原よは。大御神此岩屋よ幽居せる時よ。長白
羽命の種給^レ予まよ。葦原中圀ふ種ざ也しうば。此神の
今初終て種給へ依れ也。其を須佐之男命五十猛神此種
を持降り給へるまよ此神の
拵て降り給へる。何よまよ種之源を高天原より出よる
こと疑あし。然るを是はよと豊宇氣神の徳よ生れる事

た違無れ
ばあり。ちて麻を時とる高山ある故。高麻山とを負
みせらむ。○於此山上其御魂坐也。本は矢代社を云ふ也。
此を鈔ふ。坐屋代郷三代村高麻山青幡佐草日子命也。俗
云高塚大明神也と云ふ也。○此神之坐處と云。現世は坐
ませは間住居處を云ふ也。○大草也。本は意宇郡大草
郷郡家南西二里一百二十歩と見え。和名抄も意宇郡
大草と見ゆ。風土
記抄も大草。日吉岩坂大庭佐草四村也とあり。眞竜云佐
草日子命坐は故。地名は負とま。舊は佐草と云ふ也。
を郷と成し時ふ大草。同郡ふ。佐久佐社を載とす。此は神
を改めしあるべし。
名式ふも。意宇郡ふ。佐久佐神社と載られとす。今も佐草
村と云ふ坐を。鈔ふ見ゆ。此社を固史も仁壽元年九月
乙酉青幡佐草壯丁命授。從五

位下。ま貞觀七年十月廿八日出雲。固左草神授。從五位
上。はと元慶二年三月三日。出雲。固正五位下。青幡佐草壯
丁神。正五位上。ちて都留支日子命とす。佐草日古命。まで
あど見えとゆ。ちて都留支日子命とす。佐草日古命。まで
五柱神。あち。誰も風土記ふも。須佐乃乎命。御子と有す
て。御母の名を傳をらび。を其有し事を。或は固巡坐
之と云ひ。或は徒は此處ぞ云く。此處を云く。外ぞ詔へ
由はみ記し傳へて。固作堅給ふとは言はまども。自然ふ
其事や外く。固巡と云とす。想像して。作堅給ふる趣は
ひ。死て通ゆるは。古書の傳は。いと朴畧ふ。妙な物
ぞ有る也。おは此神等。此みあらび。固作り。固給へる。斯て
神をいと多かり。次くは注ふを見る。後し。
此神等を始。次くは神等も。固作巡と給へ。事な。悉く

須佐之男大神の神御計を正けり。其由下小委く注ふ。第九

十一段の傳
見るべし

茲健速須佐出男大神以佐世

木葉爲頭刺而踊躍出時所刺

出佐世木葉出墮出地云佐世

亦至坐須佐鄉而此囹者雖小

囹囹處也故吾名者不著木石

詔而即鎮置己命出御魂而定

給大須佐田小須佐田矣故云

須佐即有正倉亦詔朝御餼勘

養夕御餼勘養五贄組出處而

定給出處云朝酌郷也。

サダメタマロシトコロライフアサクミノサトトゾ

佐世木契冲云此在鳥草樹也。和名抄云楊氏漢語抄云。

鳥草樹和名佐之夫乃紀辨色立と見え。字鏡成説同も鳥草樹。

左之夫まと櫛左世夫ともいふ。今山里人云はせぶの木

を云。杓杓似て小兒窠ニあり。熟をまむ。紫の黒みと依やう

よて。童れどは取て食ふとぞ。杓を和名抄云比佐加木と

云木を云。云子め。記傳云仁徳天皇此御歌云佐斯夫能紀と

いふ處云此説を採りて。或人鳥草樹云。今俗云はくぶ此

木とも云やくぶ此木とも云云。倭姫命世記云佐

佐牟乃木枝といふも是なり。をいふ。真竜も此説に依て遠

此木の葉を春きて其汁をもて衣を染る。昔此色此如

し。古事記此歌云曾米紀賀斯流迹斯米許呂母といふ。曾

米紀云即さし木よて遠江人のいふそこの木なり。

と云へ。○大社記云大社此末社云。佐く布社云有て

其本地を知らば白石より西十餘町云。○頭刺云加邪斯

を訓云し。和名抄云。和名加無左之をいふ。髪挿の義云

て。頭の飾あり。伊邪那岐大神の黒御鬘。天宇受賣命此日

蔭、鬘おど有も云。もて行々ば頭此飾あり。頭刺も同じ。梅

櫻柳桂葵榊。その他餘も何ふても頭云挿あり。皆頭刺と知

流雉ルキシとあるに依て。袁杼ヲド理斯多麻布リシタマフ時爾トキニと訓法し。字書
ふ踊音勇躍音藥跳也進也。跳舞貌ハシラあぞ有て。心のいと清スガ
淨スガレく手伸タヌレく覺也。依時ふ爲らほ。態ふて。舞を舞ふマヒは。
心ぞ子別ある物ぞ。其を舞ウシえ。愴ウレシきよも悲カナシ死ふも舞マヒふ。
我踊マヒは悲き事此有てハ。得爲られぬ態あマヒ。人情オノミををを
て辨シふハ。須佐之男大神前マよを荒御魂の進スサびて。忌志
死枉事ども起し給子依を解除ハラの驗ふとマヒて御心和ナゴみ。
清しく成坐る故ふ。其勇みれ餘ゆマヒ。踊をも爲給へ依
事と知られ多マヒ。○佐世木葉之墮オチ之地云佐世踊マヒを手を
伸し足を舉げ頭を振り飛走マヒもマヒる態あ依故ふ。頭刺

此木葉の墮オチあるれマヒ。風土記ふ。大原郡佐世郷郡家正東
九里二百歩と見也。和名抄マヒも大原郡の同郡マヒ。佐世社
名式ふ。大原郡ふ佐世神社とある是マヒ。○須佐郷マヒ。風
土記ふ。飯石郡マヒ。須佐郷郡家正西一十九里と見也。和名抄マヒ
も。飯石郡の郷名マヒ。須佐とあり。朝野群載六ふ出雲国言
上管飯石郡須佐御牧マヒ。有れ古くを牧も有し。おマヒ。風
土記抄マヒ。以宮内マヒ。為郷標併朝原反部原田入間竹尾穴見
等マヒ。須佐郷マヒ。あり。真竜云須佐郷マヒ。神門郡ふ隣る山口
伊秩乙立子マヒ。通ふ路あり。まマヒ。多。○此国マヒ。と。須佐郷を認
祇の郡家へも通布と云へり。
子マヒ。今世ふ里と云ばうマヒ。此地マヒ。も古マヒ。を国マヒ。ぞ云け依。
此例今數ふ依り暇あらマヒ。○雖小国は佐波伎国那禮杼

母と訓べし。佐波伎を勢婆伎と云ふ同じ古言ふて。少し
舊く聞えと也。神代紀。少小あぢの字を。今本も世バキ也
物籍之狭物あど。而依狭と。同言あり。大國小國。○國處也。や
國と云こぞ有まぢ。其小國をを少異あ也。○國處也。や
は。小地。有れど。最好國あ也と。稱給予依御語あ也。今
の語も好と云こぞを言はで。徒ふ木也。○吾名者不著
國也あど云て。稱る意も聞ゆる語多し。○吾名者不著
木石や也。木石を書依を漢文あ。吾が御名をむ。石木の類。
由れき物。予を負せ。御田の名も負せて。後世も遺し給
む。むと詔するふて。謂也依御名代の事。此起ま依原あ也。
御名代の事。仁徳天皇。卷も委く注ふべし。○鎮置已命之御魂。須佐地。小祠
を建て。鎮置給する由あ也。次ふ有正倉。と。依即是あ也。

あ不其下。自身。魂字。記れる例。あ。ふ始。絶て見えと。ゆ。
み注べし。○大須佐田小須佐田。あ。大神御。自。御名。を負せて。定
給する御田あ也。大小は。大國小國。大忌小忌あど云。大小
を異了て。稱辭の大小と通えあ也。然るを。國も大小と
は。正。大小。此由あるを。此。抑。田は。稻種を殖る所。ふし多。
大小を。あ。聞。ざ。む。れ。也。抑。田は。稻種を殖る所。ふし多。
其種はも。豐宇氣神。此御身。ふ。始。絶て。成。出。と。依。物。也。あ。ふ。
此。大神。前。ふ。荒御魂。の。進。び。給。へ。也。し。程。を。痛。く。嫌。ひ。給。ひ
て。岩屋戸。段。の。枉。事。は。爲。出。給。予。め。あ。を。彼。解。除。ふ。と。ゆ。て。
御心直也。彼神。此御身。ふ。成。ま。る。種。ども。持。下。り。給。予。依。中
ふ。此。を。も。持。下。給。ひ。む。を。今。か。く。御田。を。定。絶。て。殖。付。け。

其田ツケ其御名を負て。御名代とさす爲給ツケ依ツケあツケ也。○正倉ホク久羅クと訓べし。即チホク祠チホクの義チホク也。令チホク正倉ホクと云チホクこチホクせチホク有チホクてチホク義チホク解チホクふチホク正倉ホク者チホク正チホク税チホクとチホクあチホクるチホクをチホク以チホクてチホク此チホクもチホク彼チホクとチホク同チホクじチホクおチホクとチホク思チホクふチホク人チホクもチホク有チホクれチホクどチホク然チホクらチホクびチホク出チホク雲チホク風チホク土チホク記チホクあチホクるチホクはチホク凡チホクてチホク祠チホクのチホク事チホクをチホク見チホクゆチホクてチホク通チホクえチホクどチホク正チホク税チホクのチホク倉チホク此チホク然チホクむチホクりチホク彼チホク困チホクみチホク多チホクうチホクるチホクべチホクきチホク由チホクあチホクくチホク殊チホクみチホク有チホク社チホクとチホク云チホクべチホクきチホク所チホクみチホクのチホクみチホク即チホク有チホク正チホク倉チホクとチホクあチホク依チホク此チホク即チホク字チホクをチホクもチホク思チホク合チホクせチホクてチホク神チホク宮チホクをチホク保チホク久チホク羅チホクとチホク云チホクしチホク例チホク也チホク垂チホク仁チホク天チホク皇チホク紀チホクふチホク五チホク十チホク瓊チホク敷チホク命チホク。其チホク妹チホク大チホク中チホク姫チホク命チホク。石チホク上チホク神チホク宮チホクのチホク奉チホク仕チホクをチホク讓チホク也チホク給チホクひチホクしチホク處チホク。大チホク中チホク姫チホク命チホク辭チホク曰チホク吾チホク子チホク弱チホク女チホク人チホク也チホク何チホク能チホク登チホク天チホク神チホク庫チホク耶チホク。五チホク十チホク瓊チホク敷チホク命チホク曰チホク神チホク庫チホク雖チホク高チホク我チホク能チホク爲チホク神チホク庫チホク造チホク梯チホク豈チホク煩チホク登チホク庫チホク乎チホク故チホク諺チホク曰チホク天チホク神チホク之チホク神チホク庫チホク隨チホク樹チホク梯チホク之チホク此チホク其チホク緣チホク也チホク。神チホク庫チホク此チホク云チホク也チホク。正チホク倉チホク也チホク。此チホク神チホク庫チホク字チホクのチホク類チホクみチホクのチホクけチホク依チホク義チホク訓チホクのチホク文チホク字チホクとチホク知チホクるチホク

富チホク久チホク羅チホク也チホク。久チホク羅チホク子チホク富チホク也チホク。添チホクりチホクさチホクるチホク語チホクまチホクとチホク洞チホクをチホク富チホク羅チホクとチホク云チホクハチホク富チホク久チホク羅チホクのチホク久チホク也チホク。省チホクりチホクさチホクるチホク依チホク語チホクあチホクるチホクべチホクくチホク所チホク思チホク也チホク。富チホクをチホク含チホクまりチホクさチホクるチホク義チホク久チホク羅チホクをチホク隠チホクうチホクあチホクるチホクこチホクとチホク外チホクりチホク。○津チホク、ちチホク、とチホク。困チホク、窶チホク、原チホク、郡チホク、保チホク、久チホク、良チホク、神チホク、社チホク、とチホク云チホクあチホクりチホクいチホクうチホク外チホク依チホク神チホク子チホク也チホク。此チホク正チホク倉チホクはチホク風チホク土チホク記チホクふチホク。同チホク郡チホク子チホク須チホク佐チホク社チホクとチホク何チホク依チホク即チホク是チホク也チホク。須チホク佐チホク郷チホク宮チホク内チホク村チホク在チホクてチホク大チホク宮チホク大チホク明チホク神チホクとチホク云チホクふチホク。須チホク佐チホク神チホク名チホク式チホク。飯チホク石チホク郡チホク。佐チホク能チホク衰チホク命チホク社チホクありチホクとチホク風チホク土チホク記チホク抄チホクみチホク見チホク也チホク。須チホク佐チホク神チホク社チホクをチホク載チホクされチホクとチホク也チホク。○朝チホク御チホク饌チホク勤チホク養チホク夕チホク御チホク饌チホク勤チホク養チホク也チホク。朝チホク美チホク祊チホク能チホク加チホク牟チホク加チホク比チホク夕チホク美チホク祊チホク能チホク加チホク牟チホク加チホク比チホクとチホク訓チホクべチホクしチホク。朝チホク夕チホクはチホクノチホクユチホクフチホクベチホクノチホクヤチホクモチホク訓チホクべチホクしチホク。師チホク也チホク。然チホク訓チホクれチホクさチホクりチホク今チホクをチホク加チホク茂チホク翁チホクのチホク訓チホクみチホクとチホクまチホクりチホクアチホクサチホクハチホクアチホクレチホク夕チホクのチホク約チホクまチホクるチホクあチホクりチホク。此チホク詞チホクをチホク祈チホク年チホク祭チホクふチホク。水チホク分チホク神チホク等チホクふチホク白チホクひチホク祝チホク詞チホクふチホク。皇チホク御チホク孫チホク命チホク能チホク朝チホク御チホク食チホク夕チホク御チホク食チホク能チホク加チホク牟チホク加チホク比チホク云チホクくチホク也チホク。あチホクるチホクとチホク。此チホクをチホク此チホクみチホクあチホク也チホク。祝チホク詞チホク考チホクふチホク。是チホクをチホク朝チホク夕チホク御チホク食チホク料チホクのチホク神チホク類チホクとチホク云チホクあチホクりチホク加チホク比チホクをチホク稻チホク穂チホクのチホク名チホクをチホク師チホク説チホクふチホク。加チホク比チホク米チホク此チホク事チホクもチホクいチホクふチホク例チホク也チホクとチホク説チホクまチホク抄チホクまチホク也チホク。師チホク説チホクふチホク。加チホク

牟加比の加。宇迦之御魂を省れ云。宇加比字を省れは
 て食。食も宇氣の宇を省れは。加と氣を省れは。一
 也。酒を佐加竹を多加とも云如く。宇氣牟加比。万葉の
 歌。御食向とと。向。神子物を手向。云も同言
 也。牟久流。云は。令向。奉。方。云詞。牟加布は。
 其を受給ふ方。云詞。然。此の勸養は借字。膳。就給多を云と有也。然。此の勸養は借字。膳。就給多を云と有也。然。此の勸養は借字。膳。就給多を云と有也。

嚴宇加能女。薪名嚴山雷草名嚴野椎。と。嚴小同。清
 明きを云詞。也。贊。新饗。轉。依詞。て食物の事
 也。新嘗の。あ。と。ハ。第四十二段の傳。注。し。贊。組。と。今
 世。某組組合。と。云詞。と。已。命。此。嚴。御。贊。を。掌。る。組
 人の住處。と。定。給。へ。る。由。ある。は。し。○朝酌郷。あ。朝。御。餼
 云。組之處。を。詔。了。依。朝。と。組。を。取。て。里。名。と。爲。と。依。あ
 也。和名抄。も。此。風土記。嶋根郡。朝酌郷。郡家。正南一
 十里。八十四步。熊野大神。命。云。と。云。て。此。故。事。を。記。せ。也。
 同記抄。朝酌。福富。大井。大海。埼。四村也。從。意。宇。郡。間。瀉。渡。
 福富之村。頭。曰。朝酌。促。戸。と。あり。眞。竜。云。郡。家。を。抄。し。相。當。
 本庄。新。庄。之。中。原。と。云。れ。古。今。道。同。じ。ち。て。同。郡。也。朝。酌。
 う。ら。び。郡。家。を。本。庄。ある。べ。し。と。云。り。

上社同下社と二社あり。抄み上社祀伊弉冉命朝酌郷大

野合祀伊弉冉命与熊野大神也といふ也。大井大神也。四社同郷多賀大神而

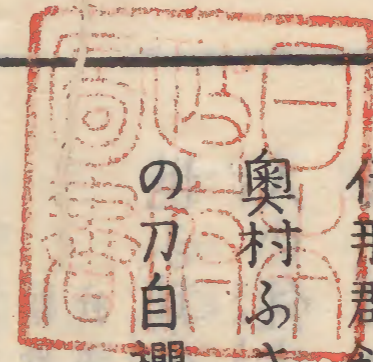
○門人岩崎長世北原信質櫻井光房ら云ふ此の十五

卷を櫻木小あらせて松のりぶとよ句は安流を科野

伊那郡飯田城の浅小家を依人あり。奥村邦秀が母刀自

奥村ふさ大原正敷が母とじ松村ぎそ櫻井盈壽の祖母

の刀自櫻井ふさ三人のねむれの志をいふ也。



淵考云云... 瑞宇の謂は...

